367
14

複写

部

362-14

刷三

法學博士福田德三著

國民經濟講話

資本經濟講話

東京佐藤出版部藏版

8. 3

坤二冊　例言

一　昨年出版した勞働經濟講話は、坤卷前冊として置きましたから、今度は、坤卷後冊とす可き筈であります
が、後冊の全部を一冊にすることは、頁數の上からも、亦た執筆の進行の上からも不可能であります。故に
後冊の一、二と分つ可きでありますが、其れでは、餘り複雜ですから、坤卷前冊を、坤卷一冊と改め、今茲
に公けにする分を、坤卷二冊と致しました。坤卷前冊を重刷する機會があるようでしたら、之を坤卷一冊と
訂正致しませう。

一　此坤卷二冊を以て、生産論の全部を終りました。三冊は、流通論を載せます。其草稿は、唯今半以上は出
來て居ますが、刊行を見るまでには、暫時手間が取れることゝ存じます。本講話が斯く豫期よりも、頁數の
多いものとなり、其進行が甚だ遲延致すことは、誠に恐縮の至りであります。

一　然し、私としては、本講話以外別に經濟原論の詳しい書物を著述することは、向後若干年の間には、迚も
力に及ばないことであります。故に、讀者諸君の知遇を受けた本講話に於て、出來る丈け十分に現在の私の
研究の及ぶ限りを申述べて置きたいのです。從つて、始めは主として通俗に大體を説明するに止める考であ
つたのですが、出來たものに就て申せば、通俗と云ふ趣意に背かない限りに於て、私現在の立場を腹藏なく
述べ盡くしたものになつたのであります。此點偏へに御諒察を願ひます。

一　佐藤氏の勸めに從ひ、此坤卷二册も、前册に倣つて、資本經濟講話と云ふ別題を掲げて、勞働經濟講話と相對せしめることに致しました。本册に載せる所は、悉く資本と資本制生産の組織とに關する解說でありますから、以上の別題は、不當ではないと存じます。

一　勞働經濟講話は、其例言に於て申述べて置いた通り、悉く自ら筆を取つて書き下したものでありますが、少し說明が六ケ敷ように感じますし、又た左樣に注意して下さつた方もありますから、本册は、一旦自ら起稿したものを、更らに森田章三君を煩はして、口授を筆記して貰つたのです。從つて前册よりは、少しくどいようではありますが、說明は餘程平易になつて、乾卷と同程度を保つことゝなつたと存じます。三册以下も同樣に、森田君に速記して貰つた反文が出來て居ります。

一　流通論は跡千頁位で、全部を終る積りであります。決して中絕せず終まで刊行することだけは、御約束申上げて置きます。唯だ時日の所は、御猶豫を乞ふのであります。

一　本講話の旣刊册に對して、誤植や誤謬を指摘して下さつたり、疑はしい點に就て質問を寄せられた多くの未見の方々には、深き感謝の意を、此機會に於て表明致します。此等の示敎は、一として等閑には附しません。本册執筆に方つても、其等を念頭に置いて、前へ戻つて說明を加へた點も多少あります。此れ偏へに敎を垂られた諸君の賜であります。

一　大野隆君は、本册印刷に方つて、三校まで全部綿密に見て下さいまして、私の見落しを訂されたるもの甚だ尠くないのであります。謹んで謝意を表します。又た、本册の刊行が、思つたより早く進行したに對しては、秀英舍と其の植字工諸君とに、深く御禮を申したいのです。

大正八年神嘗祭日の夜

國民經濟講話　目次（坤二）

第六編　生産論（其三）資本及組織……自一二九三　至一九一〇

第三十一章　資本の意義及本質……一二九三―一三七二

資本本來の意義――資本は猶母の如し――利息を離れて資本なし――子を生まぬ女・利息を生まざる富――利息は化して資本となる――資本利息を生むか・利息資本を生むか――常に止まらざる利潤の運動――資本は土地勞働とは大に異る――生産要素としての資本の特別なる地位――マルクスの說不十分なり――特別なる働は流通上に在り――土地と資本との比較――勞働と資本との比較――文化現象としての勞働と資本――マルクスの解說――資本の本質は純文化的なり――生産三要素の異同比較――地代は地面より生ぜず――絶對的生産要素と相對的生産要素――絕對的範疇・相對的範疇――資本は決して絕對的範疇に非ず――異論を排す――勞働の補助を資本の本質とする說――右說は誤謬なり――例を以て說明す――アダム・スミス此理を看破す――資本は生産せられたる

生産要具なりとの説――通説の資本の定義――右の定義謬れり――資本なる語の實際上の用法――經濟學之を轉用す――資本意義轉用の三期――轉用の第一期――轉用の第二期――バーボン及ヒュームの資本論――チュルゴーの資本論――轉用の第三期――スミス説の長所――スミス説の短所――スミスの短所累を爲す――資本概念紛亂の原因――資本は生産す、故に利息を生ずと云ふ謬説――兩觀念混同す可からず――俑を作るものはセーなり――スミスの短所は恕す可き事情あり――協業を可能ならしむるものは資本なり――スミス之れを看破す――資本のみにては生産は起らず――スミス以後の學者之を忘る――兩頭の蛇――資本生産力説と資本收益力説――マルクス蛇の兩頭を挫斷す――マルクス『資本論』の成る所以――メンガーの資本論一頭地を拔く――マルクスとメンガーの差異――バヴェルクの資本論――クラークの説――バヴェルク説の功過――資本を財の蓄積なりとする謬想――實際生活に於ける資本の觀念――株式會社に於ける一例――富と資本とを同一視する誤謬――限局せられたる財の蓄積――ジェヴォンスの奇拔なる資本論――通説と右説との比較――ジェヴォンスとマルクスの默契――ジェヴォンス説捨つ可からず――通説維持し難し――バヴェルクの價値時差説――右説は生産力説の維持し難きを示す――時差説の積極的效績は認め難し――收益と生産とは必しも相伴はず――國民經濟的資本必ずしも生産せず――資本の補助的任務の

謬想――生産を補助するものは財の蓄積なり資本に非ず――單に現在に於て一致するのみ――フシァーの復古的資本論――資本たるや否やは主觀的にのみ定めらる――從つて具體的列擧は無意味――例を以て説明すれば――ミルの資本區別論――財の蓄積ならざる資本――生産の用の眞意――貨幣價値に見積らるゝ利用――資本と私有財産制度――貨幣は資本に非ず――資本には數量的增減あるのみ――マルクスの語を以て言へば――實際の事實を以て説明す――貨幣價値額の增殖が資本の本質――換言すれば利殖卽ち資本の本質――利殖と生産――利殖本位の經濟組織――今日は生産を利殖の附帶事實とす――生産資本なるもの無し――資本は必ず私有財産なり――私有財産なければ資本なし――國有財産も私有財産なり――私有財産の二種――營利財産の意義――貨幣價値見積りの可能・不可能――富の增殖の眞義――富の增殖は多くは一部的――社會的資本の增殖なし――資本に下す最終の定義――財産と云ふこと――財産は卽ち能力――無能階級と有能階級――財産の能力は實物に非ず――オッペンハイマーの説――マルクス説を評す――マルクス説の修正――資本生産力の眞相――此働きは今日の資本組織には必然的なり――資本は協業を可能ならしむ――資本たらざる生計維持資料――資本の指導・監督――例を以て説く――資本主任務の代理者――何故に資本主は引率者たりや――資本の偉大なる能力――マルクスの説明――此狀態は萬古不易に非ず

——可能なる變化——資本と勞働の主客顚倒

第三十二章　資本の起源・增殖・及種類……一三七三—一四四三

資本化と資本形成——賃貸資本・信用資本・企業資本——資本起源の二要點——資本は貯蓄より起るとの說——此說アダム・スミスに起る——右說より生じたる謬想——貴ぶ可きは勞働にして資本に非ず——唯物觀の弊害——資本は貯蓄より起らず資本より起る——外資輸入論の看過せる點——資本化の心理的要素——貯蓄の眞意義——資本は營利の機會の增進より起る——營利の機會の增進必ずしも最善ならず——過資本化の弊害——資本化の行程——資本循環行程に關する諸說——マルクスの資本循環行程論——資本循環行程の公式——資本の回轉時間——生產時間と流通時間——勞働時間——回轉時間長短の論爭——資本の種類　固定・流通兩資本の別——アダム・スミスの說明——スミス說の轉化——マルクスの修正說——生產行程を標準とする區別非なり——價値の消費——寧ろ價値の回收——スミス說反つて取る可し——生產は資本のみにては起らず——マルクスの不變・可變兩資本の區別——右說の略評——其理由の大要——收益は地面より生ぜず社會より生ず——不變・可變資本說の取る可き場合——マルクス說とスミス說の接近——固定・流通兩資本の別寧ろ捨つ可し——獨立・從屬兩資本の區別——融通・不融通兩資本の區別——投下・經營兩資本の區別——最も重要なる區別——循環行程に對する關係より區別す——商品取引資本——商品取引資本獨立の二方法——其の利と其の弊——貨幣取引資本——利付資本——賃貸（利付）資本と企業資本——企業資本の特色——賃貸資本及信用資本の特色

第三十三章　經營の大小……一四四三—一四七五

組織中心の經濟生活——營利の組織——營利の組織と作業の組織——經營の形態と企業の形態——規模の大小より見たる經營の分類——從業者數による區別——耕作面積による區別——經濟的實質より見たる區別——其の理由——經營單位と所有單位——大所有は却つて害あり——所有は砂漠を化して樂園となす——土地は死物に非ず——中・小農の必要——畜產に就ての一例——經營を大にし所有を小にす——工業に就ては大經營——大經營の適せざる工業——大經營の普及悲觀を要せず——所謂小工業の保護——商業に於ける經營の大小——小賣業者過多なり——鎖國時代の產物——小賣組織改善の必要——丁稚制度廢す可し——小賣業の前途——デパートメント・ストアの弊——經營大小研究の必要

第三十四章　經營の形態及其發達……一四七五—一五六〇

ゾムバルトの分類——右說を評す——プヨヒアーの分類——賃仕事——出仕事と宅仕事——手工業——手工業は親方工業——手工業者の組合——我邦の座——德川時代の組合・仲間——所謂我邦特有の工業狀態——ギルドの起る所以——ギルドの起源——ギルドの全盛——ギルドの末期——京都に於ける組合の實例——江戸に於ける組合の實例——大阪に於ける組合の實例——左官業に就ての實例——鑄物師及髮結職の文書——商業の組合・問屋——家內工業起る——前貸制工業——即ち資本的工業經營——我邦は其實例に富む——家內工業の特色——家內工業以前に企業なしとの說——此說マルクスより出づ——ゾ氏の說必ずしも妥當ならず——ゾ氏說に基く論爭——家內工業と名くる所以——我邦の用語精確ならず——家內工業の問題——苦汗制度——マニュフアクチューア起る——其特色——マニュフアクチューアと工場との異同——散居式より集居式への進化——二種の起源——織物業を以て例示す——技術上統一の利益——我邦はマニュフアクチューアを缺く——西洋にても寧ろ短期の現象——工場工業——大體に於て妥當なる我工場法の規定——工場の學問上の意義——工場なる名稱の由來——ユーアの解說——工場制度二樣の定義——從屬的營業——機械と原動力——有機力よりの解放——經濟的中心原動力——產業革命の動因——マルクスの卓見——經營形態より企業形態へ

第三十五章　經營と企業……一五六〇—一五七四

ゾムバルト問題を提出す——ゾ氏說マルクス說に劣る——作業の組織・價値增殖の組織——關博士の說——ゾ氏說の重きを置く點——勞働行程——使用價値と交換價値——價値回收の行程——價値增殖の行程——ゾムバルト右說を布演す——右に對する私見——在內目的・在外目的を以て分つ

第三十六章　企業の形態及其發達……一五七四—一六一〇

二種の大分類——區別の標準——企業の主體は單位——團集企業の細別的形態——個人企業の方古し——企業の起源——家長企業・君主企業——合名會社の成立——合資會社の成立——其他の會社——代表的なるは個人企業と株式會社——個人企業の株式會社改造——株式會社と個人企業との適不適——純粹の商業は株式會社に適せず——株式會社に適する企業——工業と株式會社——農業と株式會社——漁業と株式會社——奇妙な株式會社——各種會社形態の比較——各國に於ける各形態

の分布——有限責任・無限責任——資本・勞働の出資關係——人格會社——資本會社——單なる資本の集りに非ず——合資會社は經濟上にても間の子——株式合資會社は無用の長物

第三十七章　株式會社の本質・起源・機關・任務・及利害 ……一六二——一七三七

株式會社研究の必要——法律に偏せり——法律は有限責任を最重要視す——法律上の株式會社——我商法の規定——沿革上の有限責任——形式に過ぎず本體に非ず——經濟上より見たる有限責任——萬一の場合の債權者保護——家族會社と有限責任——消極的作用——大株主と小株主——要は多數の小資本を集めんが爲——變態會社は虚僞の株式會社なり——株式資本の特殊なる冒險——今日と雖も理は同じ——法律は經濟上の實質の反面を表はす——形式に拘泥するより起る誤——聖ヂョルヂョ銀行と其『マオナ』——債權者の團體——希臘の租稅請負團——羅馬のソチエタス・プブリカノールム——其の仕組——形式は似たり——羅馬には今日の勞働の觀念なし——エンデマンの說——株式會社の實を缺く——ソチエタスは會社に非ず——マオナの語に囚はる——コムメンダを株式會社とする說——鑛山・船舶共有團體——種々の起源說——均一分割の事實は昔より有り——更に

冒險の上より見れば——株式制度は和蘭に起る——利子券と利潤券——利潤券の本質——アクチーは利潤券——利潤券の起り——特殊危險を冒す企業——株式の自由賣買——上田教授の說——利潤券に必須の條件——所謂重役制度——和蘭式と佛蘭西式又は團體式と法人式——所謂企業任務の分割——リーフマンの說——株主總會——誰が企業者なりや——株主か重役か——重役が企業者なりとの說——株主が企業者なりとの說——二者共に企業者なりとの說——會社共者が企業者なり——企業者は自然人たるを要せず——經濟生活の非人化——機關の分掌——家計と經營の分離——法人格の認承によつて分離全し——最も純粹なる資本的企業——資本の力——株式會社と資本組織——資本危險の性質の變化——資本は人身御供——物の冒險より價の冒險へ——之に應ずる企業の變化——他人に託するの危險——本質の變化に伴ふ形式——投機的となる——アダム・スミスの株式會社攻擊——嚴重なる取締——資本の動員——專制式と民主式——大陸式會社も實際は專制政治——企業利潤の民衆化——對勞働關係——株式會社の弊害——資本人を壓す——愈々無政府的となる——株式會社に代はらんとする企業形態

第三十八章　公企業　附　公經濟及公營造物 ……一七三七——一七九八

企業に對抗する諸形態——其種類三あり——公企業——公法人と營利事業——美濃部博士の公企業論——右說を評す——電車賃金の問題——電車は公營造物なりとの論——行政法學者の議論——其經濟上の研究の必要——公法人の營む事業。公經濟——公經濟の實例——無償主義に支配せらる——實費支辨主義——收益主義——公經濟と私經濟——公法人に私經濟なし——公法人の經濟の特色——不足經營と餘剩經營——目的と結果とを混同すべからず——公企業と公營造物は嚴別を要す——生硬難澁な譯語——美濃部博士の意を忖度すれば——『アンシュタルト』と『ベトリーブ』——全體的實費支辨主義——公經濟、公營造物、公企業の比較——郵便・電信・電話の性質——水道の性質——鐵道と市街電車——交通機關の要素と其本質——無償主義が理想なれども實際は然る能はず——均一主義の漸增——手數料主義に近づく——市營電車の性質——市營電車と都市社會政策——都市社會政策は財源を要す——其財源としての市營事業——營利企業不可ならず——公法人の企業寧ろ擴張せん——之を非とする論——公營造物論の弊——公企業と私企業——兩端の謬想を排す——公企業價格の觀念を要す

第三十九章　組合の意義・任務及種類……一七九八—一八五二

組合企業とは不正確——我產業組合法の規定——獨逸の組合法の定義——組合は企業に代らず之を助成す——營利組合と經濟組合——我邦の所謂產業組合——會社企業と組合——組合は企業の一部の事に當る——其特色は合同にあり——獨立人格としての會社と組合——形式上の組合と實質上の組合——一二の實例——生產組合は眞の組合に非ず——組合は寧ろ弱者の合同——資本の要素と人格の要素——會社と組合との區別の標準——人的關係薄ければ組合消滅す——其の實例——組合の責任制度——其の說明——其他の規定——組合と營利——我邦の組合多く其實なし——組合の發達國によつて異る——英國の消費組合——獨逸に於ける信用組合——佛蘭西に於ける生產業組合——畢竟は實際の必要による——組合の分類——經濟組合の二種類——同業組合のこと——現在の經濟生活に於ける組合の地位——企業組合の種類——借入組合の種類——生產組合のこと——生產業組合のこと——生產組合と生產業組合とは嚴別を要す——生產組合は頭の產物——其思想の起る所以——當時に於ては無理ならず——百年の經驗其不可能を示す——社會民主黨と生產組合——失敗の理由——重なる三箇條——部分的成功の例——望ある組合

第四十章　經濟組合と企業組合……一八五三—一九一〇

消費組合の偉大なる發達――ロバート・オーウエンの主張――消費組合の起源――其の組合の大要――現在に於ける消費組合――英國に於ける消費組合――白耳義及獨逸の消費組合――政府の壓迫却つて消費組合を盛ならしむ――獨逸の組合が廉賣主義を取る理由――店舗制と指定商制――懸賣の廢止――消費組合聯合會――建築組合の種類――經濟組合の社會的任務――殊に中流階級の福音――企業組合の三種――信用組合――小商工業者の助成――聯帶責任の力――シュルツェ・デーリッチ――ライファイゼン――小商工業と小農とは一にし難し――營利的要素の有無――之に伴ふ內容の差違――農業組合聯合會と中央信用組合――組合の機關銀行――重要なる一問題――購買組合と販賣組合――我邦の組合製絲――農業に於ける販賣組合――家畜販賣組合――農業に於ける購買組合――自己賣買と依託賣買――其他の農業組合――商工業に於ける購買・販賣組合――其不振の主要原因――人の保護と業の保護とは同じからず――生產要具借入組合――貯藏場共同組合――販賣組合――共同仕入組合――之を要するに――國民經濟組織の將來――營利主義の弊を矯正す――生產的消費者としての對抗――信用組合は過去に屬す――組合制度發達の限界――營利一點張よりの解放――獨占に對する獨占――企業聯合及合同論は後編に讓る

國民經濟講話（坤二冊）目次 終

肖像及挿畫目次

一　アドルフ・ワグナー肖像（私藏寫眞復寫）　一二八―九
二　トマス・ダキノ肖像（コンウエー氏『トマス傳』より取る）　一三三―三
三　デヴヰッド・ヒューム肖像（バートン氏『ヒューム傳』より取る）　一三八―九
四　我邦中古の手工業者（『異本職人盡歌』より取る）
（其一）鍛冶職人と其徒弟　一四八四―五
（其二）壁塗（左官）職人と其徒弟　一四八六―七
五　鑄物師文書（私藏古文書寫）　一四八八―九
六　鑄物師職座法之掟（仝上）　一四九〇―一
七　英國に於けるギルド會館の典型（アーミテーヂ氏『英國古代のギルド』より取る）　一四九四―五

八　髪結職分謂所之事（私藏古文書寫）　一五〇四―五
九　ミルの典型（ホリオーク氏『組合史』より取る）　一五四六―七
十　グスタフ・シュモラー肖像（私藏寫眞複寫）　一五八〇―一
十一　千五百九十九年末日英國東印度會社創立總會の光景（ウヰルソン氏『元帳と劍』より取る）　一五八八―九
十二　ジエノア港灣と聖ヂョルヂョ銀行（私藏地圖複寫）　一六四〇―一
十三　ジョン・ロー肖像（セルフリッヂ氏『商業ローマンス』より取る）　一七一四―五
十四　フェルヂナンド・ラサルレ肖像（バルンシュタイン氏編『ラサルレ全集』より取る）　一八四六―七
十五　ロバート・オーウェン肖像（ホリオーク氏『組合史』より取る）　一八五一―三
十六　世界最古の消費組合店舗（ホリオーク氏『組合史』より取る）　一八五四―五

第六編　生産論（其三）　資本及組織

第三十一章　資本の意義及本質

資本本來の意義

資本とは元手のことであります。人に金錢を貸付けると、其貸付けた金錢の返濟を受くるは勿論のこと、其以外に利息の支拂を受けます。此場合に於て、利息に對して區別する爲に、其貸付けた元手、元金のことを資本と申すのが元來の意義であります。拉丁語で此元金のことを Capitalis pars debiti と名けて、利息と區別致して居ります。即ち利息を生出す元金と云ふ意味でありまして、資本と云ふ時には、常に利息と相對

して考へるのであります。即ち資本と申せば貸主が同じく受取る金額の中、利息に屬しないものと云ふ意を含んで居ると共に、又其利息を生出す根本、源泉と云ふ意を含んで居るのであります。

資本は猶母の如し

昔我國では、資本のことを母銀と言ひ、利息のことを子銀と呼んだことがあります。資本は利息を生出す母で、利息は資本の産んだ子であります。母と言へば子なるものを離れて考へることは出來ません。何故なれば子のない母は有り得ないからであります。其反對に又母の無い子と云ふものもあり得ません。現に母の居ない場合は幾らもありませうが、抑々人の生れて來た時には、必ず一人の母があつたのであつて、木の股から生れたと云ふ者は一人もないのであります。父の無い基督でさへも、母だけはマリアと云ふ婦人が立派にあつたことは、流石の福音書でも否認することは出來なかつたのであります。

利息を離れて資本なし

その如くに、資本と云ふものは利息を離れては存しないものであります。如何に性格の立派な、品性高潔の婦人でも、子が無ければ母たる資格を得ることが出來ません。才色双絶、絲竹管絃、割烹裁縫の技に至る迄、何一つ備はらざることのないと云ふ佳人、家に在つては無比の賢妻、外に出ては社交界の女王と呼ばれる人でも、子が無ければ母たる資格は得られません。唯だ子を産むことに依てのみ母となり得るのであります。それと同じく如何に巨額の富が積まれて居ても、それだけでは資本となり得ないのです、利息を生出すと云ふことがあつて、初めて富が資本となるのであります。

從つて如何に零碎の金高であつても、それが利息を生出せば、立派に資本たる性質を備ふること、賤が伏屋の貧しき婦人と雖も、一人の子寶を世の中に生出した以上は、押しも押されもせぬ立派な母たるが如くであります。

子を生まぬ女・利息を生まざる富

近頃は新しい女と稱して、子を生むことを罪惡か汚行かでもある樣考へて居る婦人があるとのことですが、國に子を生まぬ女、母ならざる婦人の殖えることは、社會に利息を生まざる富、即ち資本たらざる富の殖える樣なものであります。今日の社會の組織にして變らざる限りは、利息を生出す所の富、即ち資本の殖えることに依て、經濟上の進歩發達が期し得られるのであります。利息を生まざる所の富の殖えると云ふことは、唯だ現在の滿足が得られるのみであつて、將來に亘つての國民經濟の發達を

期することは出來ないのであります。丁度子を生むと云ふことがなければ、人類の繁榮が期せられないと云ふのと同じことであります。但し現在の社會組織にして變る時には、それは別問題であります。其事は何れ後に行つて少しく申述べる積りであります。

利息は化して資本となる

此の如く資本は利息を生出すものでありますが、其利息が又利息として停まつて居つたのでは、やはり經濟上の發達は望まれないのであつて、其利息は更に化して、又資本となるのでなければなりません。恰も生れた子が成長して親となつて子を生み、その生れた子が又親となつて子を生み、斯くして人類が永續して行く如くに、資本が生出した所の利息は、化して資本とせられ、更に新なる利息を生み、其利息が又資本

となつて利息を生み、斯くして所謂資本の蓄積（Accumulation of Capital）と云ふことが行はれるのであります。故に此意味に於て資本は資本化せられたる利息なりと言つても宜いのでありまして、英吉利の有名なる詩人ウォーヅオースの言に『子供は大人の父である』（Child is father of man）と云ふことがありますが、それと同じ様に利息は資本の母であるとも言ひ得るのであります。

資本利息を生むか・利息資本を生むか

故に或る學者は、資本が利息を生出すのではなくして、利息が資本を生出すのであるとも言つて居りますが、是は雞が卵を生むのか、卵が雞を生むのかと言ふのと同じで、實は何れから言つても宜いのであります。卵が雞を生むと言つても、雞が卵を生むと言つても宜いと同じく、資本が利息を生むと言つても、利息が資本を生むと言つても宜いのでありまして、其意味は、資本として使はれようと云ふのには、先づ其處に餘裕の富が無ければならぬ、其餘裕の富と云ふのは、日常消費する所のもの以外の餘剰でなければならぬ。其餘剰と云ふのは、外から出て來た所の一種の利息であるのであります。一種の利息である所の餘剰が、何分か貯へられ、さうして其れが社會の制度に依て資本と云ふ形を取ることになるのであります。

常に止まらざる利潤の運動

兎に角資本は斷えず利息を生むのであり、利息は又斷えず資本に化して行くものであることは、現在の事實として疑ひを容れない所でありまして、生出した所の利息を更に資本として使ふと云ふことのないのは、恰も婦人が唯だ子供を生出したばかりであつて、之を哺育し、之を教育して一人前の人間にしないが如くであります。近來は

子女の哺育を厭ふ所の婦人が殖えると云ふことでありますが、國に此の如き婦人の殖えると云ふことは、利息が資本化することの少くなると同じで、今日の社會組織の下に於ては、甚だ冀はしからざることであります。即ちマルクスは此意味に於て次のやうなことを申して居ります。使用價値は決して資本主の直接の目的とする所ではないが、個々の利潤も亦資本主の直接の目的とする所ではない。資本主の目的とする所は常に進んで止まない所の利潤の運動あるのみである　資本論第一卷百六十頁　と。

資本は土地勞働とは大に異る

資本の本質なるものは、之を利息と引離して考へ能はざることは、右に申述べた通りであります。但し同じく生産要素と言ひましても、資本は土地や勞働とは其生産要素と云ふ意味を大に異にするのであります。約めて言へば、資本は生産要素でないとさへも言ひ得るのであります。私は通說に從つて、資本も矢張り一の生産要素であると認めるのであります。併ながら、其意味は餘程違ふと云ふことを先づ十分に御注意を願つて置きたいのであります。

生産要素としての資本の特別なる地位

資本が生産要素として、特別なる地位に立つて居るものであると云ふことを知るのは取も直さず今日の經濟組織の根柢を究めるのと同じことになるのでありまして、或は資本主義とか、資本的經濟組織とか、資本生産制度とか名づけるのは皆此事の意であつて、要するに資本が生産要素として特別なる働きをなして居ることを指して言ふに外ならないのであります。又資本が此の如くに特別なる、或る意味から言へば、總ての他の生産要素を遠く凌駕する優越なる地位を有つて居ると云ふことが、今日に於

ては、獨り生産組織のみならず、流通生活の全體を特色づけて居るのであります。

マルクスの說不十分なり

マルクスは此資本の特別なる働きを、主として勞働と關係する方面に於て看破致して、彼獨特の資本論を主張致したのでありますけれども、私の見る所では、是は其一を見て未だ其二を見ざるの論と言はなければならぬのであります。資本が特別の働きをなすと云ふのは、無論生産の方面に於ても著しいのでありますが、生産の方面に於て著しいと云ふことは、決して單獨の事實ではなくして、其根源は流通生活の上にあるのであります。流通生活の上に於て、資本が非常に著しく違つた働きを有つて居るからこそ、生産組織の上に於ても、資本の特別の働が現はれるのであります。故に、マルクスの說くやうに、資本を主として勞働關係の方面に於ての觀察に限ると

云ふことは、是は經濟學の通則を打破つた如くであつて、實はまだ打破り足らないのでありまして、依然として通說の束縛を被つて居るものと考へます。

特別なる働は流通上に在り

資本が資本として非常に特別の働きをなすのは、利息を產み出すと云ふ流通上に於ける其本質があるからで、此本質あるが爲に、生産上に於ても大に違つた働きをなすのであります。故に資本本質論は、嚴密に言へば寧ろ流通論に屬すべきものであると言つても宜いのでありますが、さうすると此事の意味が却つて解りにくゝなる恐れがありますから、說明が不十分に終ると云ふ危險を冒しても、今此生産論の所に於て資本の本質の大體をお話して置かねばならぬのであります。

土地と資本との比較

さて資本が生産要素中、特別なる地位を有つて居ると云ふことは、即ち右申述べた點に基いて居るのであります。即ち獨り生産上と言はず、總ての經濟生活に亘つて、資本の特別なる意味は、其本質が利息と離れて考へることの出來ないと云ふ點にあるのであります。同じ生産要素と云ふ中でも、土地は決して地代と離れられない關係を有つて居るものではありません。土地の經濟上の働き、生産要素としての作用は、地代の有無に依つて直接に拘束せられる所は一もないのであります。從つて地代と云ふ觀念がなくても、土地の觀念は十分に之を得ることが出來るのであります。今日の地代制度なるものが全部廢せられても、土地の經濟上に於ける働き、其本質に於ては、依然として渝る所がないのであります。又古に溯つて申せば、地代制度の未だ起

らなかつた時代に於ても、生産要素としての土地の働きは、今日と變らなかつたのであります。其と申すのは畢竟土地は純然たる自然要素でありまして、文明の發達、社會組織の發達に依つて左右せられない所の、土地本來の不變性を有つて居るからであります。無論土地は經濟生活の進歩に從つて、段々違つた作用を現はして來たことは勿論でありますが、それは土地の文化的方面であつて、此文化的方面は、之を土地の自然的方面に比べますれば、從たる地位に立つて居るのであります。而して此文化的方面たる土地は、以下申述ぶるやうに、今日經濟生活の實際に於ては、之を資本として取扱つて居るのであります。即ち前に土地を論ずる所に於て申しました、土地の資本性なるものがこれであります。土地本來の固有の性質、即ち其不變性に至つては、純然たる自然事實であります。

勞働と資本との比較

勞働に至つては大分これとは違ひまして、著しく資本に似た點があります。即ち今日普通勞働と稱するのは、前編に於て詳しく申述べたやうに、原則としては賃銀勞働のことを指して申すのであります。でありますから今日に於て勞働と申せば一定の賃銀を受けて他人の爲に營む力作のことであります。此意味に於ける勞働の觀念には賃銀の觀念を引き離すことは出來ないのであります。殊に段々申述べた通りに、勞働の能率は賃銀の高低に依つて著しく影響せられるものであります。でありますから此點からのみ見ますると、勞働と資本とは全く同じやうなものであつて、資本の觀念が利息の觀念と引離すことが出來ない如くに、勞働の觀念は勞銀の觀念と引離すことが出來ないのであります。併しながらそれは今日の賃銀制度の下に於ける勞働に就て

觀察した時の話であつて、勞働本來の本質ではなく、勞働の現在の實際狀態たるに外ならないのであります。勞働の本質は何であるかと云ふことは、前に既に申述べた通りに、在外目的の爲めに營む所の力作を言ふのであります。即ち力作の爲にする力作でなく、力作に依る或る結果を見込んで營む時、是が卽ち勞働であります。而して其結果を望むと云ふ爲には、必ず苦痛を伴ふものであると云ふことが勞働の本質でありまして、この本質は、決して賃銀の有無に依て左右せられるものではないのであります。此點から申すと勞働は土地と同列に立つべきものであります。即ち純自然的要素たる所の土地は、人間社會の文化現象、經濟上の流通現象たる地代に依て左右せられないで、主として其物理的、並に化學的性質に依て定められるのでありますが、勞働も其本質に至つては、人間の生理的力作としてのみ定められるのであります。唯だ今日の實際社會に於きましては、勞働は資本と同じ樣に、人間社會の文化現象、經濟上

の流通事實である賃銀や利息に依つて左右せられて居るのであります。

文化現象としての勞働と資本

併しながら同じく社會の文化現象の影響を蒙ると申しましても、勞働と資本とは又大に違ふ點があるのであります。其差異は何であるかと申すと、勞働が賃銀と引離して考へることの出來ないと云ふのは、單に其一の狀態であるに過ぎない、其本質ではないのであります。然るに資本に至つては、其本質として、初めから終り迄、利息とは切つても切れない緣があつて、利息がなければ資本も決して無いのであります。勞働の勞働たる所以は、賃銀を得ると云ふことではない。反之資本の資本たる所以は、利息を生むと云ふことの外に何もないのです。今日の社會に於て、勞働が其在外目的として賃銀を得ると云ふことを有つて居ると云ふことは、勞働を營む所の人、即ち勞

働者の立場から見た話でありまして、勞働其もの、立場から申せば、在外目的は物の利用を作出し、又は利用を增すと云ふことであります。これがあるからこそ、賃銀を得られると云ふことが起るのであります。利用を生み、又は作出すと云ふことがなければ、今日の賃銀制度の下に於ても、賃銀を得られると云ふことはないのであります。資本に至つては、物の利用を作出し、又は之を增すと云ふことがなくとも、利息は生ずるのであります。又其利息の生ずると云ふことは、物の利用を增す、若くは作出すと云ふことゝは、必ずしも原因結果の關係を有つて居るのではなく、兩者は全然別の事實であります。寧ろ今日の實際社會に於ては、雇主が勞働者に對して一定の賃銀を與へると云ふことを約束し勞働者が之に對して其義務を盡した以上は、約束した賃銀は、必ず之を拂はなければならぬのでありまして、利用の作出しがあつたか否か、利用の增加があつたか否かと云ふことは、直接に之を問ふものではありません。けれど

も何の爲にさう云ふ約束をなしたかと云ふ動機を尋ねて見れば、勞働は利用を作出し、又は之を增すと云ふことを認めるからであつて、それがなければ、賃銀を拂ふと云ふ約束を雇主が結ぶと云ふことも亦無くなるのであります。資本に就ては必ずしもさうではないのであります。

マルクスの解說

マルクスは此事を次のやうに申して居ります。『使用價値の形成者としての勞働は、一切の社會形態から獨立して居る所の人間の生存條件であつて、人間と自然との間に於ける材料の變化を行ふに就ての自然的必然事項である』と。玆にマルクスが自然的必然事項と言つたのは、即ち利用を作出し、又は增加すると云ふことでありまして、これがなければ賃銀は得られない譯であります。唯だ今日の實際に於きましては、直

ちに結果の方を見まして、勞働と云ふものは、何時も賃錢を得るものであるから、勞働は賃錢と離れないものである、勞働は賃錢を生ずる所の力作であると、手短に言つてしまふのでありますが、之を詳しく吟味して見ますれば、右申す通りになるのであります。即ち賃錢が得られるから生產となるのではなくして、生產が起るから賃錢が得られるのであります。而して又勞働者の得る所の賃銀の高と云ふものは、必ずしも其勞働の生產高と相伴ふものではありません。場合に依つては勞働者の自ら作出した利用の高、即ち勞働の生產高よりも遙かに少しのものしか賃銀として得られないことも隨分あります。此事は前編に於てマルクスの餘剩價値論を批評する際に稍詳しく申述べて置いた通りであります。でありますからして、勞働と賃銀とは必ず相伴ふものであると云ふことは、此點から言ひましても當を得て居らないのであります。此點を誤るが爲に種々なる間違を惹起すのでありまして、殊に勞銀の高は即ち勞働の生產の

高を言表はして居るものであると云ふやうな、頓でもない誤つた考へが廣く行はれるのであります。

資本の本質は純文化的なり

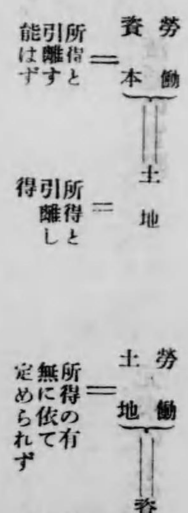
所が資本となると、大に其趣を異にして來るのでありまして、資本の本質は、初めから終りまで常に利息と離れては存在しないのであります。資本の資本たる所以、資本の經濟上に於ける働きは、一に利息を生出すと云ふことに存して居るのでありまして、其以外に資本の本質なるものは全く無いのであります。勞働に於ては、賃銀が得られると否とに拘はらず、生産に盡すものでありまして、勞働の勞働たる資格は、賃銀の有無に依つて定められるものでないと云ふ反對に、資本は利息を生むと云ふ以外に資格を有つて居らないのであります。

生産三要素の異同比較

即ち前に申した所の文化要素たることは資本の方が遙に多く之を備へて居るのであります。否、資本の本質は、全く文化的たるのみであつて、少しも自然的の本質なるものは無いのであります。之に較べて見ますれば勞働の方は、文化的方面も備へては居るけれども、其根柢に於ては、自然要素であるのであります。或る點から言へば、勞働は資本と同列に立つて土地に對抗して居りますが、本質の上から言へば、勞働は土地と同列に立つて、資本と對抗して居るのであります、其事を一寸次に圖解して見せう。

流通の實際

元來の本質



右の説明

今手近の例を以て右の説明を致して見ませう。土地とは恰も單に一人の男子、若くは女子と云ふが如きものでありまして、其本質の上に於ても、實際の狀態に於ても、男子たり女子たりと云ふことは、子供の有無と云ふことには何等の關係がないのであります。其反對に資本は前に申す通りに、母の如きものでありまして、其本質は勿論、實際の狀態としても、子供の有無に依て母たるか否かと云ふことが定められるのであります。然るに勞働は兩者の中間にあるもので、例へば一家の家長と云ふやうなものであります。家長と云ふことは、其本義の上から申して、子供の有無に依て定められる觀念ではありません。一家の主宰者であれば家長であります。併し實際の事實としては、家長たる人は大抵の場合に於て同時に人の父でありまして、何人かの子供を有し、之に對して家長たるの權を有し、義務を負ふて居るのであります。即ち子供を離れて家長と云ふことを考へることは、實際の問題としては不可能であります。然るを皮相の觀察者は、此實際の狀態を以て、直ちに勞働の本質と速斷してしまつて、勞働が賃銀を離れて考へることの出來ないのは、資本が利息を離れて考へることが出來ないのと全く同じであると主張するのであります。是は實際の事實として、家長と云ふものは少くとも人の父であると云ふ有樣から速斷して、家長とは必ず子供を有するものならざるべからずと云ふが如くでありまして、大なる間違であります。本質の上から言へば、家長たる資格は決して父たる資格と同一ではありません。昔何れの國にもあつた所の彼の家族共產體に於きましては、一家の中には家長の子たる以外の者が澤

山に含まれて居るのであります。我邦に於ても、例へば飛驒の白川に於ける、所謂大家族に於ては、一軒の中に家長の妻子は勿論、祖父、祖母、弟妹、伯叔父母、甥、姪、從兄弟、從兄弟達、再從兄弟、再從兄弟達等を包含し、是等總ての者に對して家長たる所の權利を有して居るのであります。今日一般實際の事實としては、一家と言へば、父母と其間に生れた子女等から成ると云ふのが普通でありますけれども、昔に於ては必しもさうではなく、飛驒の白川に於ける狀態の如くでありました。即ち勞働は今日の實際に於ては、賃銀と離れて考へることは出來ないことになつて居りますけれども、其本質は決してさうでないのは、此例と同じことであります。

地代は地面より生ぜず

故に今日の賃銀制度が全く無くなつても、勞働の勞働たる本質に至つては、何等の

影響を蒙らず、依然として勞働たることは、地代制度が無くなつても、土地は土地として何等の變化が起らないのと同樣であります。マルクスは地代は地面から生ずるものでなく、社會から生ずるものである（『資本論』第一卷四十九頁）と申して居りますが、勞銀に就ても、矢張同樣のことが言へるのであります。勞銀は生産物から生ずるものでなくして、社會から生ずるものであります。地代も生産から生ずるのではなくして、流通社會から生ずるのであります。此社會から生ずる所の地代なり勞銀なりと云ふものは、純然たる社會現象であります。即ち此社會現象は資本に就いては其の全部を支配しますけれども、勞働と土地に就ては其全部を支配するものでないのであります。

絶對的生産要素と相對的生産要素

此意味に於て、同じく生産要素と云ふ中に、絶對的生産要素と、相對的生産要素と

アドルフ・ワグナー
Adolf Wagner
(1835-1917)

を分つ必要が起つて來ます。土地と勞働とは絶對的生産要素でありますが、資本は絶對的生産要素でなくして、相對的生産要素であります。此事を言換へて、土地と勞働とは自然的生産要素であり　資本は社會的若くは文化的生産要素であると言つても宜いし、又資本は、歴史的法律的産物に外ならぬと言つても宜いのであります。

絶對的範疇・相對的範疇

獨逸の學者は範疇（Kategorie）と云ふ言葉を使ひます。此範疇に絶對的範疇と相對的範疇とを區別致しまして、土地と勞働とは絶對的範疇、又純經濟的範疇なりとも言ひ、之に對して資本は相對的範疇或は文化的範疇、歴史的範疇、法律的範疇なりなどゝも申します。絶對的範疇、純經濟的範疇、又は自然的範疇と申すのは、何れの時代何れの制度の下にもある所の普通的範疇と云ふことでありまして、歴史的發達、法律

制度に依て初めて生ずるものでないと云ふ意味であります。之に反して相對的範疇、歴史的範疇、法律的範疇と云ふのは、歴史的の産物、法律制度の結果として出來たものと云ふ意味でありまして、是は主としてロドベルトス、ラサルレ、或はマルクス等の主張する區別でありますが、アドルフ・ワグナー氏の如きも此區別を認めて、之を可なり詳しく論じて居られます。ワグナー氏『經濟學原論』第二版第二編三十九頁以下及『理論的社會經濟學』第一卷三十頁以下を御覽下さい。唯ワグナー氏は、資本には絶對的範疇としての資本と相對的範疇としての資本と二つの方面があると言つて居られます。之に反してマルクス竝にラサルレ等は、資本は唯だ相對的範疇たるのみで、絶對的範疇と云ふやうな方面はないと申して居るのであります。

資本は決して絶對的範疇に非ず

此點に於ては、私は全くマルクス竝にラサルレの說に從ふ者でありまして、資本

に絶對的範疇と云ふ方面は全然無いと確信致します。ワグナー氏を初め、今日の經濟學者の大多數は、資本に絶對的相對的兩範疇の意味のあること、土地や勞働と異ならないと主張して居られますが、是れ實に經濟學に於て資本の觀念が甚だ複雜、甚だ曖昧である事實の根本的原因であると存じます。經濟學の上に於て學者の意見の一致しないものは隨分ありますが、資本の定義位意見の區々たるものは殆ど他に其類が無いのであります。其因つて起る源は、資本を斯く二つの意味に解釋すると云ふ所にあると思ひます。依て其事を少しくお話して見ませう。

異論を排す

資本は相對的範疇たるばかりでなくして、同時に又、絶對的範疇であると稱する人達は、畢竟資本を以て土地や勞働と全く同じ意味に於ける生産要素と認めやうと欲するからであります。恰も賃銀を離れて勞働を考へたり、地代を離れて土地を考へたりすることの出來るやうに、資本も亦利息の觀念から獨立して考へ得られるものなりと主張せんとするのであります。語を換へて申せば、資本の本質は總ての點に於て勞働の本質と違はないもの、兩者は生産要素として全く同一地平線上にあるものと見やうとするのであります。即ち勞働の本質に於ては、賃銀を得ると云ふことを離れて利用の生産と云ふことの存するが如くに、資本も亦利息を生出すと云ふ實際の事實から獨立して、別に生産上に於ける其本質があると云ふ考へが主になつて居るのであります。

勞働の補助を資本の本質とする說

然るに利息から獨立した所の生産上の本質と云ふものは何であるかと云ふと、彼等は答へて申すに、それは資本が『生産上に於て勞働を補助すること』即ち是である、

『勞働の補助機關たること』是れであると答へます。勞働が力作に依て材料の形態の變化を執行し、物の利用を作出し、又は利用を增加するに當つて、資本は之に馳せ加はつて、其働きを增すのである、即ち勞働の能率を增進するものである、殊に近世に至つては、資本あるが爲に、生産の働きの增し方が實に著しいものであると申します。否、彼等は一歩を進めて言ふには、今日の生産組織に於ては、資本の助けなくしては、勞働は殆ど何等の用をなし能はぬ、勞働の勞働たるは、資本の助けがあるからで、それがなければ勞働は何の役もしない、勞働者に材料を供給することも出來ず、勞働要具を與へることも出來ない、今日の勞働者は勞働力ありと雖も、之を活用する機會を有たない者である、從つて資本の補助が無ければ、勞働は生産要素たる機能を少しも盡すことが出來ないものであると申します。

右說は誤謬なり

併ながら是は事實の一方のみを見た考へでありまして、他方から見ると、資本が資本たり得るは勞働があるからであつて、勞働がなければ資本は何等の用をなさないものであります。如何に巨額の資本を有する人があつても、勞働者があつて生産の實行に當ることがなければ、資本は何等の用をなさないと云ふ極めて明瞭なる事實のあることを看過して居るのであります。

例を以て說明す

例へば今茲に一の紡績工場があつて、數千の職工を雇ひ、生産を致して居る。之に要する所の資本は一億萬圓である、此一億萬圓を以て各種の大規模なる設備をなして

居ると致します。然るに一朝疫病が流行つて、其の職工が皆死亡し、而して之に代るべき所の勞働者が得られないと云ふ場合には、如何に立派な機械があり、如何に整頓した設備ありと雖も、此紡績工場は一本の絲をも紡ぎ出すことも出來ず、又一錢の利益をも生出すことも出來ず、唯だ徒に場所を塞げて居るに過ぎません。或は工場たり、或は機械たると云ふに止まつて、資本たる實は全く失はれるのであります。或は一の炭山に於て坑夫の同盟罷業が起り、勞働者は皆仕事を罷めてしまつて、而して其團結が固くて、他から一人の勞働者をも補充し得られないとすれば、此炭山は如何に巨額の資本を有するとも、何等の生産をなすことが出來ない。其間に、如何に巨額の資本があつても、其は資本たる性質、富たる性質を全然失つて居るのであります。であるから、資本の助けがなれば勞働は勞働たり能はないと云ふことが眞なりとするならば、又其反面に於て、勞働の助けなければ、資本は資本たり能はないと云ふことを

言はなければなりません。

アダム・スミス此理を看破す

アダム・スミスは此事を夙に看破致して居りまして、固定資本は流通資本の助けがなければ何等の生産をも營むこと能はずと言つて居ります。アダム・スミスが茲に流通資本と言へるは、主として勞働者の衣食の料に供する資本を言ふのでありまして、勞働の助けあるにあらざれば、固定資本は何等の利益をも生ずるものでない、即ち資本たるの實の無いものであると云ふことを明に道破して居るのであります。此事は何れ又先きに行つて少し詳しくお話することもありませうが、兎に角何れから言ひましても、勞働と資本とは互に相倚り相助くるものであると云ふことは疑ひを容れないのであります。唯だ其相倚り相助け合ふ中に、何れが主たるものであるかと言へば、

それは無論勞働が主たるものであつて、資本は從たる地位に立つものであると云ふことは、之を忘れてはなりません。

資本は生産せられたる生産要具なりとの說

偖てソコデ經濟學者の大多數が主張して居るのには、生産に當つて對等なる地位にある所の、勞働と資本の違ふ所は、勞働は生産に當つて、斷えず新に出て來る所の力である。藏つて置いたものが擔ぎ出されて來るのではなくして、生産しつゝ出て來るもので、恰も河の流れの如きものである。之に反して資本は、溜り水の樣なものであつて、過去勞働の結晶體であると申すのであります。此意味に於て彼等は、資本は生産せられたる生産要具 produzierte Produktionsmittel であると申します。

通說の資本の定義

ソコデ彼等は資本に次のやうな定義を下します。曰く『資本とは過去勞働の産物の蓄積であつて、更に新なる生産の用に供せられるものである』と、學者に依ては色々之に潤色を施したり、文句を練つたりして、少しづゝ違つたことを言つて居りますけれども、其要點を煎じ詰めて見れば、何れも右の外には出でないのであつて、是が今日でも、まだ普通の經濟學の書物に廣く採用せられて居る所の定義でありますが、是は全く唯物觀に囚はれたる所の定義でありまして、私は之を資本の技術的又は唯物觀的定義と名け、全然之を採用しないのであります。此定義たる、畢竟資本を以て土地や勞働と全く同一なる所の自然條件、自然的存在物、獨逸學者の用語で申せば materiells Substrat と見ようと言ふのでありまして、其由つて來る所は、彼の十八世紀の終

りからして、我が經濟學を支配して居つた所の唯物主義にあるのであります。今日に至りましては、資本の働きと云ふものが非常に偉大であるが故に、此の如き偉大なる資本を、勞働に對して從たる地位に置くと云ふことは、何だか資本の威嚴を損する、資本が歴史的範疇に外ならないと云ふとは、是が大に輕視せられる嫌がある、從つて資本を一の生産要素と認むるには、之を土地や勞働と全く同じ意味のものとしたい、それでなければ又論理上の透徹をも缺いて居ると考へる人も少なからずあります。是等の人に取つては右の定義は誠に都合が好く出來て居りますからして、是が廣く歡迎せられるのは無理もない話であります。

右の定義謬れり

併ながら此定義程資本の眞相を誤り傳へたものはありません。而してそれが爲に學

問上にどの位害を流して居るか知れないのであります。否、酷く申せば、經濟學全體の發達は、是が爲に大に妨げられたと申しても言ひ過ぎではありません。何故となれば、定義の上では右のやうにチャンと定めましても、事實上少しも資本の眞相に當つて居りませんから、段々資本を論じて行く上に於て、始終矛盾不都合が起つて來て、迚も此定義の通りの解釋では可けなくなつて來るのであります。ソコデ色々違つた解釋を下して、資本のことを論ずるやうになり、それが爲に多數の人の解釋が、識らず知らずの間に變つて參りまして、學者の間にも樣々の誤解が起つたり、言葉爭ひが起つたりして、餘程頭腦の勝れた人でなければ、それが誤解であるか、混線であるかと云ふことを看破ることが困難となり、殊に實際上の問題を論ずるに當つては大に不都合が生じ、其矛盾撞著は終に拾收すべからざるに至つたのであります。資本論位滅茶々々な議論の交換さるゝものはないと云ふことは、即ち是から起つて來たのであります

す。なぜ斯う云ふやうに滅茶々々になつたかの顚末、又幷に其滅茶々々の起るのは當然であると云ふことを以下少しくお話して見ませう。

資本なる語の實際上の用法

資本のことを英語ではキアピタル（Capital）獨逸語ではカピタール（Kapital）佛蘭西語でもカピタール（Capital）伊太利語ではカピターレ（Capitale）和蘭語でカピタール（Kapitaal）と申して、何れも皆同じ言葉を用ゐます、皆拉丁語のカプート（Caput）と云ふ字から出て來たのであります。カプートとは家畜一頭二頭と云ふときの頭の意味で、恰もペクニア（Pecunia）と云ふ字が本來家畜のことであつたのが、後には財産を意味するやうになつたと同じ事であります。昔は家畜が主なる財産でありまして、何頭かの家畜を有して居る者が即ち資本主で、其の所有して居る家畜は即ち資本であり、家畜の生む所の仔が即ち利息であつたのです。詰りカプートは元金、頭金と云ふことでありまして、我國で母銀、母錢、元金、元銀、元本など丶申したのと全く同じく、利息を生出す本と云ふことであります。獨逸では昔はハウプト・ゲルド（Hauptgeld）とも申しました。ハウプトとは頭のこと、ゲルドとは金のことで、やはり頭金と申すことであります。英語では十八世紀の頃まで、資本のことをストック（Stock）と申して居りました。現にアダム・スミスは、資本のことを大抵ストックと言つて居ります。ストックとは元來貯藏品、又は備付品と云ふ意味でありますから、アダム・スミスは此ストックに形容詞としてキアピタル（Capital）と云ふ字を加へてキアピタル・ストック（Capital stock）と云ふ字を資本と云ふ意味に使つて居ることもあります。其意味は元手となる所の貯藏品と云ふことであります。

ノキダ・スマト
Thomas d'Aquino
(1:25-74)

經濟學之を轉用す

字義を申せば右の通り、西洋に於ても、我が日本に於けると同樣に、資本、元金、元手のことを指して言つたのであります。其後の實際の用語法はどうであるかと云ふと、經濟學者は別として、實業界では、今日と雖も資本と云ふ言葉を、依然として元の意味に使つて居るのであります。即ち利息を生出す元金、之を指して資本と言ふことは少しも變らないのであります。唯だ經濟學の上に於ては、之に違つた意味を付けて居るのです。實業界に於て、利息を生出す元金と云ふ以外に資本と云ふ字を用ゆることもありますが、それは經濟學者の說に感化せられた結果に外ならないのであつて、決して實際上の必要、或は事實から起つて來た用法ではありません。即ち經濟學と云ふ學問だけに於ては、資本と云ふ字に特別の意味を付けて用ゐて居りますが、そ

れは實際上の使用とは全然懸け離れた、全く不思議の現象であります。なぜ學問上に於て此の如くに意味を違へて用ゐるやうになつたかと云ふと、それには可なり長い歴史があるのであります。其事を少しく申上げて見ませう。

資本意義轉用の三期

資本なる語に特別なる意味を付けるやうになつたのは、凡そ三つの時代を經て來たのであります。其第一はメルカンチリズムの影響を受けた時代であります、メルカンチリズムの起るまでの歐羅巴の經濟思想と云ふものは、著しく基督教神學の影響を受け、殊に資本の利息に就ては、所謂利息禁止論と云ふものが廣く行はれて居りました。此事は私の『經濟學研究』にトマス・ダキノの經濟學說に關連して可なり詳しく論じて置きましたから、志のある方は其に依て御覽を願ひたいのでありますが、

簡單に申しますと、基督教神學の利息禁止論の基く所は二つあるのであります。第一は基督の言葉に『汝等何をも望まずして貸與へよ』と云ふのがあります、第二はアリストテレースの說に、『貨幣は貨幣を生む能はず』と云ふのがあります。貨幣は貨幣を生むものでないのに、貨幣を貸して、恰も貨幣が貨幣を生んだかの如くに利息を取るのは、不都合であると看做したのです。又基督の言はれたやうに、他人に金錢を貸して、其報酬として利息を望むと云ふことは宜しくないと云ふのであります。從つて基督教信者は、金錢を貸しても決して利息を取るべきものでない、但し異教徒は別である。即ち猶太人は利息の收受をしても差支ないが、基督教信者は利息の收受をなすべきものでないと云ふのでありまして、是が段々色々の變遷を經まして、後には法律上の禁止ともなりました。所が歐羅巴に於ける經濟上の活動が段々發達して來るに從つて、此の如き實際の必要に反したる教義の維持される譯はありません。終に是は死

文徒法となつて、法網を潛る工夫が色々起り、實際に於ては利息の收受が殆ど公然と行はれるやうになりました。

轉用の第一期

ソコデ、メルカンチリズムが起つて參りまして、一方には此舊思想を打破し、又他方には貨幣の經濟上に於ける作用を大に尊重したのであります。貨幣は貨幣を生む能はずと云ふやうな說は之を否認して、貨幣は貨幣を生むものである。從つて資本に對して利息を取るのは至當のことであると唱へるやうになりました。所で貨幣の生む所の貨幣、これ即ち利息であると主張するに就きましては、然らばなぜ貨幣が貨幣を生むかと云ふことを說明しなければならない。唯だ元金に對して利息が付くと云ふだけでは、誠に其論據が薄弱のやうに感ぜられます。ソコデ貨幣が貨幣を生むと云ふことは、

貨幣には貨幣を生む丈けの力がある、即ち貨幣には生産力がある、資本と云ふものは生産に役立つものである、と云ふことを說かねばならぬやうに感じて來たのであります。マルクスは此事を說明して、G（貨幣）が G¹（貨幣に其利息を加へたもの）となる、貨幣を生む所の貨幣即ち資本なりとは資本主義の魁たるメルカンチリズムの唱へた所である（資本論第一卷百十八頁）と申して居ります。即ち此れによつて資本の意味は大分擴張せられたのであります。單に利息を生む所の元金と云ふことに附加へまして、生産に役立つもの、富を增す力のある所のもの、即ち資本であると解釋するやうになつたのであります。

轉用の第二期

所が第二の時代が更に之に次で參りました。それは即ちメルカンチリズムに反抗して起つた所の時代で、專らフヰジオクラットの說が行はれた時代であります。メルカンチリズムは右に申す通りに、資本は貨幣の形に於て大に用をなすのである。貨幣の形に於て生産を助ける働きをなすのであると說きましたが、此說は餘りに貨幣を尊重し過ぎた說であると言つて、之に反抗して起つて來た所の學者達は、貨幣たる資本に生産力があるのではない、貨幣が其價値を言表はして居る所の物に生産力があるのである、であるから、資本に生産力のあることは、成程メルカンチリズムの學者の言ふ如くであるけれども、それは貨幣其ものに生産力があるのではない、貨幣は唯其價値を代表して居るに過ぎない、生産力を有つて居るものは、代表者たる所の貨幣でなく、貨幣に依つて代表せられたる夫れ〳〵の實物、夫れ〳〵の富にあるのである。であるから資本を元金である、一定の貨幣の額であると云ふのは間違である、生産力のある資本と云ふのは、財の蓄積を措いては外にはないと、斯く說くやうになつたのであり

ムーヒ・ドッヰヴデ
David Hume
(1711–76)

ます。即ち此等の論者は、資本の生産力と云ふ觀念はメルカンチリズムから之を承け繼ぎ、而して更に之を進める爲に、今度は此生産力を貨幣の額と云ふことから全然切離してしまつたのであります。謂はゞ資本と云ふ言葉は、庇を貸して母屋を取られたやうなものであります。元は利息を生む所の元金、即ち一定の貨幣額であると解釋せられたものが、其貨幣額は生産力があるから利息を生むのであると云ふやうになつたのは第一期でありますが、更らに第二期に至つては、成程生産力なるものはあるが、其生産力は貨幣の額にあるのでなくして、貨幣の額が代表して居る物にあるのだと云ふことになり、從つて元金と云ふことゝは全然縁が無いことになつてしまつたのであります。

バーボン及ヒュームの資本論

此說を最も早く明瞭に主張したのは、英吉利の學者で甚だ卓越した意見を有つて居つたニコラス・バーボンと云ふ人であつたのですが、此人の著述は不幸にして世の中に普及致しませんで、後世に至つて全く忘れられて仕舞ました。從つてバーボンは後世には殆ど何等の感化を與へて居ないのであります。之に反して右の說を學問上に打立て、長く後世の仰ぐ所となつたのは、同じ英吉利の學者で、大哲學者であつた所のデヴイッド・ヒューム其人であります。ヒュームは或る意味に於ては、近代經濟學の父と言つても宜しいので、アダム・スミスの學兄、哲學上に於ては、著しくアダム・スミスを感化し、又經濟學上に於ては、アダム・スミスより先きに、略ぼアダム・スミスと同じ樣な說を唱へた、非常の卓見家であります。彼の大なる功績の一としては、資本の觀念を擴張した第二の時代を完成したと云ふことにあるのであります。即ちヒュームは其『政談』と云ふ論文集の中に收めた利息論と云ふ一章に於て資本の利息の高い

低いと云ふことは、貨幣の額には少しも關係のないことである、利息の高い低いを定めるものは、現存する所の財の蓄積これであると申して居ります。但しヒュームは此財の蓄積を、直ちに名づけて、これ即ち資本なりと迄は明言して居りません。此點は稍々徹底して居らない憾がありますが、併し此處迄論じ詰めますれば、殘す所は唯だ一歩あるのみで、ヒュームの所謂現存せる財の蓄積これ則ち資本なりとは、容易く看破し得る所であります。

チュルゴーの資本論

其處へ百尺竿頭更に一歩を進めた人が出て參りました。それは則ち前にも一寸名前を出して置きました佛蘭西の大政治家であつて、且つ大經濟學者であつた所のチュルゴー其人であります。チュルゴーは極めて明快に斷言して居ります。即ち彼れの一代の名著である所の『富の形成及分配』に於て次の如く申して居ります。己れの消費するに要するより、より多くの財を收得する人は、其餘剩を取つて置いて之を蓄積することが出來る、斯く蓄積したる所の財（チュルゴーは之を蓄積したる價値 valeurs accumulées と名づけて居りますが、此處で價値と云ふ字は有價物と云ふ意味で、即ち價値を有する財と云ふことであります）こそ、吾々が呼んで資本となす所のものである、而して此財の總量即ち資本は、金屬から成立つとも、金屬以外の他の財から成立つとも、何等相違のあるものでない、何となれば、貨幣は總ての種類の財を代表し、反對に總ての財は貨幣を代表するものであるからであると。即ち此說に依つて、資本觀念の擴張の第二期が十分に完成せられたと申して宜いのであります。

然るに斯く迄擴張せられた所の資本の觀念は、第三の時代に入りまして、一方に於ては著しく狹められましたが、他方に於ては又著しく擴張せられて、終に其終結を告げたと申して宜いのであります。即ち其第三期の完成者は他ならぬアダム・スミス其人であります。チュルゴーの說に依りますれば、財の蓄積は皆資本であると云ふのでありますが、是は餘りに空漠に失することは言ふまでもありません。之を正確なる學問上の觀念としようとするには、何等かの限定を下す必要があります。アダム・スミスは即ち其必要を見て取つて申す樣、財の蓄積は更に之を二つに分けなければならぬ。第一の種類は直接の消費に當てられ、從つて何等の收入を生ぜざる財の蓄積是れである、第二の種類は其所有者に收入を持來らす所の財の蓄積是れである。資本とは此第二種類の蓄積のみを言ふのであつて、第一種類の財の蓄積は資本ではない、是はStock for immediate consumption（ストック、フオア、イムメヂエート、コンザムプション）直接消費の爲の蓄積、今日の言葉で申せば、享樂財、

若しくは消費財であると申して居るのであります。

スミス說の長所

アダム・スミスの此說たる實に千古に亘る所の卓見と言はなければならぬのであります。所で若しもアダム・スミスにして、これだけに止めて置いたならば、資本に就て今日のやうな混雜は起らないで濟んだかも知れないのであります。資本とは其所有者に收入を與ふる所のものと云ふことは、千古不磨の名言と言つて宜いのであります。然るに後世に至つて色々の混雜が生じて、折角アダム・スミスが斯く道破した所の微妙なる眞理が、殆ど全く忘れられたかの如くなつてしまつたのは實に殘念至極のことゝ言はねばなりません。即ちアダム・スミスは、利息を生む所の元金と云ふことの中、元金と云ふことは之を捨てましたけれども、『利息を生む所の』と云ふことを何處まで

も拉へて居つたのであります。而も『利息を生む所の』と云ふ言葉を、更に適切に言改めまして、『其所有者に收入を得せしめる所の』としました。是は確に進歩であります。併ながらアダム・スミスはフヰジオクラットの唯物觀に著しく支配されて居りましたから、『財の蓄積』と云ふことを同時に唱へて居るのであります。是は間違であります。其事は何れ後で申上げます。兎に角アダム・スミスはチュルゴーが擴めた所の觀念を著しく正しい道に導き、之を狹めたことに依つて、學問上大なる功績を樹てたのであります。

スミス說の短所

然るにアダム・スミスは斯く一方に於て資本の觀念を狹めると共に、他方に於ては著しく之を擴張致しました。其擴張したことが即ち今日の混雜紛亂を招く基を作つ

たのでありまして、此意味から言へば、彼れは功過相半すと言つても宜いのであります。それは何を申すかと云ふと、チュルゴーは其資本の定義に、消費するより、より多くの財を收得する人は云々と申して居ります。即ち何處迄も個人と云ふ立場からのみ資本を見て居るのであります。自分が消費するよりも、より多くの財を收得する人は之を餘剩として蓄積することが出來ると云ふのは、個人に就て言つて居るのでありまして、國全體とか、社會全體とか云ふことはチュルゴーは少しも考へて居らないのであります。利息を生む元金と云ふ場合には、無論個人の立場から見たのでありまして、此點に於てはチュルゴーは、言葉の本來の意味を嚴重に守つて居たのであります。然るにアダム・スミスは、之を著しく擴張したのであります。即ちスミスは個人の立場から資本を見ると同時に、更に社會全體、國全體の立場からの資本もあると說いて居るのであります。今日申す所の社會的資本、或は國民經濟的資本と云ふ觀念は、畢竟ア

ダム・スミスに其源を發して居るのであります。茲に於て一方には收入を生ずるものと生ぜざるものとの區別を明かに立てゝ、觀念を大變明瞭にしたのに、他方に於ては個人の立場から見た資本と、社會の立場から見た資本と云ふ、二つの非常に懸け離れたものを、一の資本と云ふ言葉の下に結び付けるようになつたのであります。併ながら此二つのものが、一つの言葉で結び付け得られるものならば、是は結構のことであります。此二者は決して一つ言葉の下に結び付けられ得るものではないのであります。資本と云ふ一の總稱を設けて、其中に小分けとして、個人的資本と、社會的資本と云ふ區別を置くと云ふ樣なことは、恰も水と油とを混じて一の化合物を作らうとするが如くで、到底出來ない相談であります。

スミスの短所累を爲す

アダム・スミスが一たび此の如くに資本の觀念を擴めましてからは、經濟學の上に於きましては、多くの人が其方にのみ專ら力を注ぐようになりまして、彼れが看破つた正しい方の方面は、それが爲に全く蔽はれてしまふようになりました。謂はゞ出店の方が本店を壓倒したと申しても宜しいのであります。即ち收入を生ぜざるものと、收入を生ずるものとを、嚴重に區別すると云ふことは忘れられてしまつて、資本と言へば個人の立場から見たものゝみならず、同時に社會或は國全體の立場から見た資本と云ふものをも混同すると云ふことが段々蔓つて來て、終に今日に至つたのであります。

資本概念紛亂の原因

何故斯くすることによつて紛亂が起つたかと申すと、個人の立場から見た資本と云ふものは、アダム・スミスが正確に言表はした通りに、『其所有者に收入を與ふる所のも

の』是が其本質であります。個人の所有する所の資本であるからこそ、其持主に收入を與へるのであつて、個人の所有でないものが收入を生ずる道理はありません。何となれば收入を生ずると云ふことは、各々財産を分有して居るからあるとで、社會全體が持つて居るものから收入を生ずると云ふことはないのであります。マルクスが申した通り、地代は地面より生せず、社會より生ずるのです、況や利息は品物から生ずるのでなくして社會から生ずるのであります。社會から生じて、誰人かに歸着するからこそそれが收入となるのであります。誰人の懷にも入らないものは、それは收入とはならないものです。個人が各々分有して居ると云ふ狀態があるからこそ、利息と云ふことがあるのであります。でありますからアダム・スミスが言ひ破つた、『其所有者に收入を與ふるもの』と云ふのは、唯だ個人の立場から見た資本のみに就てあり得るとで、而して個人の立場から見た收入に就ては是が即ち其本質であるのです。

然るに社會の立場から見た資本、所謂社會的資本と云ふものには『其所有者に收入を與へる』と云ふことはありません。又利息を生出すことが其本質でもありません。メルカンチリズムの學者が初めて言出した、所謂『生産力』と云ふとが其本質であると認められて居ります。即ち社會の立場から見た資本と云ふのは、社會の生産の要具として役立つ、或は社會の生産に當つて勞働を補助すると云ふことが其本質であると一般に解釋せられます。さう解釋する外は、解釋の仕樣がないからであります。所が其所有者に收入を與へると云ふことゝ、社會から見た所の生産の役に立つと云ふことゝは全く別のことであります、兩者の間には何等の關係がありません。再びマルクスの言葉を假りて言へば、所有者に收入を生ずると云ふことは、地面から生ずるのでなくして、社會から出る。社會の生産の役に立つと云ふことは、是は地面から出ることで、社會から出ることでないのであります。此兩者は全然區別しなければならぬもの

であります。然るに此の如く懸け離れたものを、資本と云ふ一の言葉の下に繋ぎ合せますからこそ滅茶苦茶になつてしまふのであります。此矛盾はアダム・スミス以後の學者も、全く氣付かないのではありません。能く考へて見るとどうも此兩者は結び付け難いと云ふことが分るのであります。故に何とかして之を結び付けなければならぬと云ふ必要は、勝れた學者は認めました。

資本は生産す、故に利息を生ずと云ふ謬説

そこで兩者の間に因縁を付ける爲に、どう云ふ工夫を用ゐたかと云ふと、事柄の性質の上に於て解釋することは到底出來ませんから、唯だ言葉の上で巧く言ひ廻して結び付けてしまつたのであります。即ち『資本とは收入を生ずるものなり』、『資本は生産に役立つものなり』と云ふことを、一の文句に結び付けて、『資本は生産するもので

ある、だから利息を生ずるのである』と、斯う致しました。是は一寸聞くと、如何にも無理のない説明の樣に聞えます。けれどもそれは、唯だ言葉の上だけで、だからと云ふ言葉で無理に結び付けたのであつて、何故だからであるかと云ふ説明は少しもして居りません。生産するから利息が出ると云ふことは、どうして言へるかと云ふことは、是等の學者は少しも説明しないのであります。唯だ生産するから利息が出ると、斯う言つて居るのであります。

所が實際の事實として、生産したつて必ずしも利息は出ません、生産しなくても利息の出る場合が幾らもあります。だからでも何でもないのです。正當に言へば『資本は生産す』、『資本は利息を生ず』と、二つバラ〳〵に言はなければならぬのです。兩者は結び付けらるべきものではありません。是は強制結婚の如きものであります。少しも一緒になる意志のない者を、唯だ親達の命令で無理に説服して、言葉の上だけで

承知致しました、一緒になりますと言はせて、是で圓滿に婚姻が成立つたと稱する如きものであります。もと〳〵強制結婚でありますから、合せ物は離れ物、却つて後に種々なる騷動が起るのであります。今日の資本理論は、強制結婚で一緒になつた夫婦が絶えず喧嘩をして居る樣なものであります。

兩觀念混同す可からず

『資本は生産す』と云ふことは、生産上の觀念であります。『資本は利息を生ず』と云ふことは、貨殖、又は營利上の觀念であります。貨殖と生産とは全然別のものであることは、前にも既に一寸説明して置きました。尤も今日の生産組織は、皆營利組織になつて居りますから、此意味から言へば、兩者は殆ど同一物と言つても宜いのであります。けれども從來の經濟學の上に於ては、貨殖と生産とは全然別のものとして居りました。別の物として取扱はれますから、個人的の資本、社會的の資本と云ふものが對立するのであります。

俑を作るものはセーなり

此の如き混同の源、端緒はアダム・スミス之を開いたのでありますけれども、スミスに於てはまだ其弊は救はうと思へば救へないことはないのです。若し頭腦の非常に優れたる緻密なる學者があつて、此混雜を豫め防いで置いたならば、今日の如くにならないで濟んだでありませうが、不幸にしてスミスの後に出て、彼れの説を承紹いで、更に之を敷衍した人は、一向獨創の見解がなく、唯だ人の説を巧に模倣し、祖述するを能とした、彼の佛蘭西のヂャン・バチスト・セーであります。是は誠に學問の爲に不幸のことゝ言はなければなりません。下手の妥協や調停をする人よりも、寧ろ破

壊をする人の方が遙に眞理の發見に役立つのであります。別れべきものならば早く衝突して別れてしまつた方が後の爲に宜い。それを無理に何だとか彼だとか言つて、仲裁したり、妥協したりして、嫌がるものを強て押付けて置いた所が、遂にはそれも不可なくなつて、更に別れることになります。其時は兩者の感情は益々荒んで、到底融和の道がないやうになつてしまふのであります。セーは此極めて下手な媒酌口を利いたと云ふ責は、どうしても免れません。

スミスの短所は恕す可き事情あり

アダム・スミスに於ては、資本の觀念を一方には狹め、一方には擴張して、其間に矛盾を生じたと云ふことは、大に諒とすべき事情があるのです。それはアダム・スミスの經濟學研究の抑々の出立點を考へて見れば分るのであります。アダム・スミスの『國富論』の出立點は、如何にして國の富を殖やすべきか、如何にして生産を增加することを得べきかと云ふ一點にあつたのであります。ソロデ彼れは、國の富を殖やす第一の要件は、一國勞働の能率を增進するにありと看破したのであります。一國勞働の能率を增進するには、種々の要件もあるが、其中に就て一番有力なのは、分業の發達是であるとは、彼れが獨特の著想であります。從つて『國富論』は、其開巻劈頭に於て分業を論じて居る事前編に申述べた通りでありまして、是が國富增進論、生産增加論の根本的出立點であります。

協業を可能ならしむるものは資本なり

所が前編の終りに於て稍々詳しく申上げた樣に、分業の發達には先づ第一に組織が必要であり、殊に最も多く能率を增進するのは分業に基く所の協業（マルクスの所謂

arbeitstheilige Kooperation）是であります。而して此分業的協業を起すものは、取りも直さず資本であるとは、マルクスが十分に説明した所でありまして、而してアダム・スミスも此點を看破して居つたのであります。資本の生産上に於ける任務は即ち是でありまして、協業を可能ならしめると云ふことが、資本の生産上に於ける働きであります。

スミス之れを看破す

是は夙にアダム・スミスの看破した所であります。スミスは主として此點から資本を觀察して、其生産要素たる本質を論じたのでありまして、是は洵に其當を得て居ることであります。スミスの説に依れば、一國の生産の增進は勞働能率の增進に俟たなければならぬ、能率の增進に最も有力なる分業の發達には資本が要る、是が資本の生命であると云ふのであります。ソコデ彼れは之を言葉を約めて申すには、資本とは勞働を助けて分業を發達せしめ、生産期間が長く掛つても、安心して其結果を待つことを得せしめるものである、資本は勞働補助を生命とする生産要具である、而して總ての生産は畢竟勞働から起るのであるから、勞働補助要具たる資本も、亦背て一度は勞働に依つて生産せられたるものに外ならない、一度生産せられたものが、直ちに其場で消費せられないで、將來の生産に於て勞働を助ける爲に蓄積せられる、是が即ち資本であると說いたのであります。

資本のみにては生産は起らず

資本のみでは生産が起り得ない、之に反して勞働は、勞働のみでも生産を起し得るものであることは、アダム・スミスは十分に之を認めて居ります。唯だ土地が私有せ

られ、財産が蓄積せられるやうになると、資本の助けのない勞働と云ふものは、能率が甚だ低いものである、故に能率を高からしむる爲には、資本を要するのであると申して居るのであります。ですから資本と勞働とを同一列に置くと言ひましても、其間に輕重の區別あることは、アダム・スミスは十分に之を認めて居ります。勞働は一の獨立した生産要素であるが、資本は獨立した生産要素でない、勞働の補助者である。即ち私が前に例として擧げた如くに、勞働者がまるでなくなつてしまへば、如何に巨額の資本があつても其資本は資本たるの實を失つてしまふと云ふことは、アダム・スミスは之を否定して居らないのであります。

スミス以後の學者之を忘る

然るにアダム・スミス以後の學者に於ては、此點を段々忘れてしまつて、言葉の上では、資本は勞働の補助要具であると言つて居りますけれども、實際に於ては主客を轉倒して、資本があるから生産が起るのである、資本は勞働の恩人なりと云ふ方面のみが力説せられる樣になつてしまつたのであります。是は十八世紀の終から十九世紀に掛けて、各種の機械生産が起り、大規模の工場が起つて來ました結果、資本の必要が盛んになり、其資本の働きは、目に見えて顯著なものでありますから、是が爲に學者の觀察が段々鈍くなつて來たのであります。マルクスが之を罵つて、是等の學者は皆資本閥の奴隷であると言つたのは、無論言ひ過ぎでもありますけれども、滿更評妄の言ではありません。

兩頭の蛇

成程資本の働きは極めて顯著なるものであります。けれども勞働がなければ、其顯

著なる働きは少しも起らないのであります。再び前の例を以て申せば、子を生む者は必ず女でありますけれども、女のみで子が生れるのではありません。唯だ子供の生れる時は、必ず女から生れますから、女さへあれば子が生れるものであると速斷するが如くであります。今日の通說たる資本論は、此の如き速斷から出來上つたのであります。所が是は生產論に於ける資本論でありまして、流通論、即ち普通の言葉で申せば分配論に入ると、學者の態度がガラリと變つて參ります。變らなければならぬから變るのであります。其結果今日の經濟學に於ては、資本は恰も兩頭の蛇の如きものになつてしまひました。一度生產論に頭を出した資本は、暫時にして其頭を殁し、影を潛めて居つたかと思ふと、再び分配論に至つて頭を出して來ますが、今度出して來る頭は、生產論に於て出した頭とは、まるで別な頭であります。それが爲に淺薄なる學者は面喰つてしまつて、何れが資本の眞相であるか分らなくなつてしまふのであります。土地や勞働は、生產論に於ても、分配論に於ても、同じ頭を出して參りますから、其取扱ひに面喰ふことはありませんが、資本に至つては、全然別な頭を出して來るのであります。

資本生產力說と資本收益力說

即ち生產論に於ては、主として社會的資本、或は國民經濟的資本と唱へ、『生產力の所有者』として出て居ります。然るに分配論に至つては、『利息を生む者』『其所有者に收入を與ふる者』として出て參ります。此兩者は全然別のものであります。是れ私が今日の資本論を以て兩頭の蛇であると申す所以であります。生產論に於ける資本を基として立てた所の說は資本生產力說（Produktivitätstheorie des Kapitales）と申し、分配論に於て出て來る收益を、主としたものを、資本收益力說（Rentabilitäts-

theorie des Kapitales)と申します。生産力説と收益力説とは、資本論に於ける蛇の兩頭であつて、此兩頭は常に嫉妬深く、激しく相爭つて居ります。

マルクス蛇の兩頭を挫衂す

經濟學の通説が此蛇の兩頭間の爭ひに大に惱まされて二進も三進も行かなくなつてしまつた時に、茲に非常に優秀なる頭腦を有する一大學者が現はれ、鋭利なる快刀を以て、此蛇の兩頭とも之を斷絶して、禍根を取り去らうと致しました。それは別人ではありません、屢々其名を擧げましたカール・マルクス其人であります。マルクスが其經濟學革命の企てゞある一生の大著述に冠らするに『資本論』(Das Kapital)と云ふ名を以てしたのは洵に意味深長なとであります。彼の『資本論』は決して狹い意味に於ける、單純なる資本論ではありません。資本論なる名の下に、彼れは經濟學の全體

を總括して、之に徹底的の批評を下して居るのであります。彼れの同志たるロドベルトスの資本論も、略ぼ同じ意味のものでありますけれども、マルクスの資本論と比べては、遙かに劣るものであります。而して又經濟純理論、殊に價値論に於て、最も有力にマルクスの誤謬を駁擊したボエーム・バヴェルク氏の一代の大著述がやはり『資本論』であるのも、偶然か故意か、甚だ趣味の深い暗合であります。ボエーム・バヴェルクの『資本論』も單純なる資本論ではありません。彼れの經濟純理論の極粹を一括したる經濟原論と認むべきものであります。經濟學の父たるアダム・スミスは其書に冠らすに『富』と云ふ名を以てし、其の最大批評家の一人たるマルクスは、其著書に冠らすに『資本』を以てしたと云ふことは、吾々に取つて大に意味のあることゝ言はなければなりません。

マルクス『資本論』の成る所以

アダム・スミスは富の増進を以て終生の研究と致しました。而して彼れは偉大なる功績を立てました。併ながら其富の一部分たる資本に就ての彼れの説明が不十分であつた爲に、經濟學は邪道に踏入つた嫌ひがあります。之を指摘したのがマルクスの『資本論』であります。又アダム・スミスの時代には、富の増進と云ふことが何よりも大なる問題でありましたが、マルクス以後の時代に於ては、それに劣らぬ、否或はそれよりも優つて大なる問題は、生産流通の兩方面に亘つて、資本なるものが一種特別なる働きをなして居ること是れであります。それには無論善い方面もあるが、又善くない方面もある。之を究めることは、即ち今日の經濟生活の眞相を究める所以である、是が即ちマルクスが採つて其研究題目とした所であります。

メンガーの資本論一頭地を抜く

マルクスとボエーム・バヴェルク以外に、資本論を試みた學者は無數でありまして、苟くも經濟のことを論ずる學者で、資本を論ぜざる者は一人もありません。又經濟學者にして多少なりとも獨創の意見を立てゝ先人の糟粕を嘗むるに安んぜない人は、資本に就ては必ず何等かの新説を提出することを怠つて居りません。併ながら此等無數の學者の中、私の見る所に於てマルクス、ボエーム・バヴェルク以外に、毅然として一敵國の觀を成して居るのは、墺太利學派の領袖たるカール・メンガー其人であります。ヒアルド・ヒルデブランドも略ぼメンガーと同じやうな説を立てゝ居ります。

マルクスとメンガーの差異

マルクスは、アダム・スミス以來行はれて居る通說の資本論を根柢から顚覆せんと企てたのであります。彼れは今日の經濟學者大多數の正反對に立つて居る者であります。メンガーも亦經濟學者の大多數とは違つた說を唱へて居りますが、併し其意味は同じではありません。即ちマルクスは純經濟的範疇又は絕對的範疇としての資本と、歷史的、相對的範疇としての資本との區別を明かにして、前者は全然之を否定し、之に依つて資本生產力說を眞正面から打破したのであります。即ち資本を生產要素と認むると、其事を全然否定して居るのであります。又勞働との關係に於て、資本は勞働の最大補助者であり、最大親友であり、恩人であると云ふ、スミス以來の通說を全く斥けて、資本には左樣な効能は寸毫もないと主張するのみならず、更に一歩を進めて、資本に次のやうな定義を下して居ります。曰く『資本とは勞働者を奪掠し、制御する手段なり』と。即ち資本は勞働の恩人親友でないどころか、不俱戴天の仇であると申

すのであります。英吉利に於きましては、土地の所有と云ふものは、勞働並に動產資本とは、決して利益が兩立しないものであると云ふことが、夙に唱へられて居りまして、リカードの如きは、可なり極端の說を唱へて居りました。是は英吉利特有の實際の事情に基くのであります。恰度それと同じやうな意味に於いて、マルクスは今日の時代に於ては、資本と勞働とは、利益の全然相反するものであると云ふことを、其根本的立場と致して居るのであります。我邦に於いても近來河上博士は餘程之に近い說を主張して居られるやうであります。『經濟論叢』大正七年七月號揭載同博士論文『剩餘價格の成立』を御覽なさい　カール・メンガーも通說と大に違つた說を唱へて居りますが、併しマルクスとは、趣きを異にして居るのであります。即ち彼れは、資本の本質を唯物觀的に解釋することを斥け、殊に實際の用語法から全然遠ざかつて、學者が勝手に定めた所の、抽象的解釋を下すことを痛擊致して居ります。彼れは自ら名づけて、現實觀念と稱するものを主張して居ります。

即ち資本の解釋は、實際生活に於て、昔から今日迄繼續して用ゐて居る意味を、其儘採れば宜しい。學問上に於て、別にそれと違つた定義を作る如きは全く無用であるのみならず、甚だ有害である。實際の用語法として、資本とは利殖即ち所得形成の用に供せられる貨幣額又は或人の財産中利殖用に當てたる部分を謂ふのであるから、學問上に於ても亦其通りに解釋すれば宜い。それが最も正當にして、又最も便利なる解釋であるとして、其以外の解釋は、總て排斥して居るのであります。即ちマルクスは蛇の兩頭とも此を切斷しましたが、メンガーは一頭だけ切去つて、一頭だけ生かして置かうと云ふのであります。私は大體に於て、此メンガーの說に贊成する者であります。

バヴェルクの資本論

最後に出て來たボエーム・バヴェルクは、右兩者と異つて、蛇の兩頭とも之を生かして置いて、唯だ兩者の間の爭ひを一掃せんことを努めたのであります。即ち此資本なる蛇には、兩頭があると云ふことを絕えず忘れないで、資本を論ずる時には、其何れを指すかと云ふことを、一々的確に指摘さへすれば、無用の混雜は防ぐことが出來るから、生産力說と收益力說とは、二つながら之を認めて差支ないものであると申して居るのであります。即ち今日の學問上に於ける資本なるものは、兩頭を有する蛇であると云ふことを明確に知らしめ、又之を混同することの不可なる所以を指摘したことは確にボエーム・バヴェルクの功績と言つて宜いのであります。そこで彼れは資本には私的資本（Privatkapital又は營利資本とも特殊經濟的資本とも名づけます）と、社會的資本（Sozialkapital又生産資本とも社會經濟的資本とも名づけます）の二つがあると申し、私的資本は、收益力の觀念に依て解釋すべく、社會的資本は、生産力

の觀念に依て解釋すべしと主張するのであります。畢竟するにアダム・スミスの說に戻つて來たやうなものであります。唯だアダム・スミスは、此二つは別のものであることを十分に明かにしなかつたのを、バヴェルクは、其區別を何處迄も判然としなければ可けないと云ふことを主張したのであります。故に氏の說は、一の中庸說、折衷說であります。さうして生產論に於ては、專ら社會的資本、分配論に於ては、專ら私的資本を問題とするのであると致して居りますから、私が之を評して蛇の兩頭とも之を生かして置くと申す所以であります。

クラークの說

右バヴェルクの說に對して、米國現存經濟學者中の第一人とも申して宜しいクラークは、資本と資本財（Capital と Capital goods）の區別を施すべしと主張して居ります。

而して同氏は此說を本として、バヴェルクとの間に太西洋を挾んで、近來の學問上の最大論爭と言つても宜い位の、長い間の論爭を重ねましたが、吾々は之を第三者の立場として見まして、洵に趣味深いことに感じました。併し是はクラークのやうな頭腦優秀の學者にして、初めて企つべきことであります。其他に於ても、亞米利加人、獨逸人等で、彌次馬に飛出して、雜魚の魚交り的に、色々のことを言ひましたが、それ等の多くはタワイもない說であります。クラーク氏の說によれば、資本と云ふのは、一の抽象的觀念で、之に對して具體的のものが資本財である。即ち資本と云ふのは、土地とか、家屋とか、商品とか云ふやうな具體的のものを指すのでなくして、全體としての富、又は價値の原本（Wealth 又は Fund of value）を指すのである。資本財とは、土地とか、家屋とか、機械とか、原料とか云ふ、個々の具體的物件を指すのである。而して資本と資本財とは、一致することもあるが、必ずしも一致するとは限らないと申

すのであります。是は中々優れた説でありまして、大に採つて參考とすべきものであります。私も或る意味に於ては殆どクラーク氏の説と同じやうに考へて居るのでありますが、唯だ資本に對して資本財と云ふのは、甚だ紛らはしい言葉で、當を得て居らぬと思ひます。資本は何處迄も唯だ一の意味に之を用ふべきものであつて、之に對して具體的のものは、資本と混同の嫌のない、まるで別の言葉を以て之を言表はすべきものと思ひます。其事は後に至つて稍々詳しく申上げる積りであります。

バヴェルク説の功過

バヴェルクの説は、折衷説であつて、如何にも都合が好いやうに考へられます。故に今日現在の學者の中でも、彼の説を採用する者が大分多いやうであります。併ながら折衷説と云ふものは多くは鵺的のものでありまして、一寸見ると洵に重寶でありま

すが、實際上の問題を解釋するに當つては、却つて不便不都合が起つて來ることが多いのであります。バヴェルクが折角骨折つて説き出した説は、其實餘り改良になつて居りません。實質に於てもアダム・スミス以來の通説以上に出でないし、其説き方に於きましても、同氏が非常に骨折つた程の甲斐はないものと存じます。バヴェルクの功績は、唯だ兩者の區別を明瞭にしたと云ふ一點にありまして、從來資本と云ふ言葉を、或る時は私的資本の意味に使ひ、或る時は社會的資本の意味に使つて、之をゴチャ〳〵に混同して居つた弊を矯めたことは大に感謝すべきことに相違ありませんが、幾ら區別し、辯明致しましても、元々同じでないものを、一の觀念の下に纏めやうとすること其事が無理であります。辯明を要すると云ふことは、既に多少疚しい所があるからであります。本當に正しいものならば、何等の辯明を要せずして、直ちに人に諒解せらるべき筈であります。又バヴェルク自らは、兩者を明瞭に區別して説いて居り

ますけれども、氏を祖述する人に至つては、やはり何時の間にか其區別を判別することを忘れてしまふことを免れません。從つて論理上の混雑は依然として存するのであります。否バヴェルク自らも、場合に依ては此區別を判然としないで、漫然と資本全體のことを說いて居る所もあります。私はバヴェルクの說は、どうしても之を採ることが出來ません。依て其理由を明にし、兼ねて又今日の通說の誤れる所以を御了解願ふ爲に、以下少しく說明を加へて見ませう。

資本を財の蓄積なりとする謬想

第一に申上ぐべきことは、メルカンチリズムに對する反動時代、即ち資本觀念の擴張の第二期に於て、資本を以て財の積蓄であると看做したことが、大なる間違ひであると云ふこと、是であります。財の蓄積（獨逸語で Gütervorrat 英語で Store of

goods）を以て資本と看做す事は、此第二期以來引續いて一般に行はれて居る所の說でありまして、資本に關して可なり進んだ考へを有つて居る人でも、此點は餘り變つて居らないのであります。資本は財の蓄積でないと主張する學者は、寧ろ甚だ少數であります。是れ畢竟今日の經濟學の思想が、猶未だ自然法論時代の唯物觀に著しく囚はれて居ることを有力に證據立つる所以であります。私は經濟學から此種類の唯物觀は悉く取り去らなければならぬといふことを固く信じて居るものであります。殊に資本の觀念に於て、之を財の蓄積と認むると云ふ思想は、是非驅逐しなければならぬと存じます。其他、資本は過去勞働の蓄積であるとか、或は蓄積せられたる所の勞働であるとか、又は生產せられたる生產要具であるとか、言葉は色々違つたのを使ひますけれども、觀念の上に於ては、何れも資本を以て具體的の物として現在存して居る一塊りを指すものであるとするのであります。

實際生活に於ける資本の觀念

然るに實際上に於て、企業者が資本と名づけて居るものは、決して此の如き具體的の物件を指して言つて居るのではありません。最も分り易い例を以て言へば、株式會社の資本金一億萬圓也と云ふ、其一億萬圓といふものは、會社の所有して居る所の土地なり、家屋なり、工場なり、機械なり、個々の有形物の全體ではないのであります。是等の有形物に少しも變化がなくとも、例へば會社が增資を行ふ、即ち資本を增加する、或は其反對に減資を行ふ、資本を減ずると言ひます。或る會社が一億圓の資本を八千萬圓に切り下げたと言ひましても、會社の所有して居る所の有體物が、俄に減つた譯でも何でもなくして、其等のものは依然として其處にあつても、資本は減額せられたと云ふ場合が幾らもあります。獨り會社のみでなく、皆さうであります。

個人の或る營業者が、一萬圓の資本を以て營業すると云ふ、此一萬圓と云ふことには、少しも變りがなくても、其一萬圓の貨幣價値を有つて居る所の物は、日々に、否時々刻々に變化して居るのであります。決して一定の財の蓄積が其處にあるのではありません。今日の活動の盛なる實業界にありましては、固定したる所の財の蓄積などゝ云ふことはあり得やう筈はないのであります。

株式會社に於ける一例

更に進んで、例へば株式會社の場合に就て考へて見ると、此道理が尙明かになります。株式會社の株主は、夫れ〳〵資本を株式會社に提供して居るのでありますが、此の株主の提供して居る所の資本と云ふものは、決して會社の所有して居る所の具體的の物件ではないのであります。或る人は一萬圓、或る人は二萬圓、或る人は十萬圓の

株券を所有して居る。併しそれだけの資本を會社に提供して居ると云ふことは、決して會社の有體財産の何分の一を有つて居ると云ふ意味ではありません。故に、例へば會社が營業不成績であつて、解散する場合に於きまして、各株主に會社の有體財産を夫れ〳〵分配して、甲の株主には機械一臺、乙の株主には土地を幾坪、丙の株主には原料品をどれ程と云ふ風に分配したとて、決して資本を償却したと云ふことにはなりません。是等の株主は、例へば會社から機械を一臺貰つた所が、之をどうすることも出來ません。彼等に取つては何等の價値がないもので、却つて置場にも困る、厄介千萬、無用の倉敷料が掛る丈けであります。株主は、其提供した所の資本を、貨幣を以て、又は貨幣に代るべき何物かを以て償却して貰つて、初めて其の提供した資本を戻して貰つたことになるのであります。

富と資本とを同一視する誤謬

今迄の通説が、蓄積と云ふ觀念に囚はれました結果、資本と富との區別を下すことの出來なくなつた例は、少なからずあります。例へば前に擧げたチュルゴーの說の如きは其好適例であります。チュルゴーは、總ての富を以て資本であると云ふて居るのであります。若し資本と富とが同一物であるならば、何も二つ違つた言葉を用ゆる必要はありません。單に之を富と名づけるか、若くは單に之を資本と名づけるか、何方か一方に止めて置いて宜い譯であり、又さうしなければならぬのであります、同一の物を異つた名前で呼ぶと云ふことは、却つて觀念の混雜を惹起するに過ぎないのであります。富と資本と、二つ別々の言葉を使ふ以上は、二つの異つた別々の觀念を認めるのでなければなりません。即ち富と資本との間には、何等かの區別がなければなら

ぬのであります。

限局せられたる財の蓄積

所が財の蓄積、過去に於て生産せられたる財の積んだ塊りが資本であると言ひますと、富と資本との區別は、之を施すことが六ケしくなります。ソコデ今日に於ては、資本と富とを區別する必要を一般に認めるやうになりまして、唯だ漠然と財の蓄積即ち資本であると言ひッ放しにする人は、殆ど無くなつてしまひました。必ず之に何等かの限界を付けます。財の蓄積にして、或る資格を帶びた時のみ、之を資本と名づけると云ふことにして居るのであります。

ジェヴォンスの奇拔なる資本論

英吉利のジェヴォンスは、前にも申しました通り、極めて獨創的の頭腦を有する優れたる學者でありますが、通說の資本論に滿足することが出來ずして、一の新しい說を立てました。即ち彼れは、資本とは生産を容易ならしむる爲に用ゐられる財であるが、其生産を容易ならしむる財とは、勞働者をして、其生産に從事して居る間、生活せしむる物のみを言ふのである。其以外に生産を容易ならしむる財なるものはない。即ち資本とは、勞働者の生活維持品のみを謂ふのであると斷定致して居ります。彼れは一の例を引いて、或る鐵道會社が鐵道を布設した、其鐵道は、此會社に取つて資本であるかと云ふと、其は決して資本ではない、資本たるものは、此鐵道の建設に從事した勞働者の食料是れであると言つて居ります。是れは甚だ奇拔の論でありまして、一見間違ひではないかと思はれる位變つた說き方であります。而して此說を駁擊する人も隨分ありますけれども、兎に角ジェヴォンスは、單に財の蓄積であると云ふことだ

けでは資本とはならない、之に何等かの限界を付けなければならぬとし、ソコで其限界を、彼れは『勞働者の消費に充つる生活必要品』と云ふことに求めたのであります。

通說と右說との比較

之に對して通說に於きましては、總ての財の蓄積を資本とは言はないが、如何なる限界を之に附けたかと云ふと、それは『生產の用に供せられる』と云ふこと、是であるとしてあります。即ち資本とは、『生產の用に供せられる財の蓄積』であると致しました。故に之をジェヴォンスの說に對して見ますと、丁度正反對の樣に見えます。ジェヴォンスは『消費に充てるもの』と言ひ、通說に於ては『生產の用に供するもの』と言ふ。生產と消費と、相對立して居るやうに考へられます。けれども更に深く立入

つて通說を吟味して見ますと、決してジェヴォンスの說と反對に立つて居るものではありません。アダム・スミス以來、資本が生產の用に供せられると云ふことは主として勞働者の生活を維持すること、勞働者に生產用の要具を供すること、又生產用の材料を供給することを謂ふとしてあります。生產要具並に材料は、消費せられなければ生產の用には立たないのであります。材料は材料として價値を失つてしまはなければ、生產は起りません、生產要具も長年使用して居る間には、終には消滅して其價値を失つてしまふものであります。或は一回限りの使用にしか堪へないものもあります。從つて此點から、資本に固定資本と流通資本との別を設くるのであります、其事は後に至つて詳しく申上げます　兎に角生產の用に供せられると云ふことは、其內容を吟味して見ますれば、何れも皆消費せられるものであります。勞働者の生活用品は勿論、生產要具でも、生產の材料でも、皆消費せられるものでありますから、ジェヴォンスが消費と云ふことを眞向に振翳したのと、一見大變違ふ樣に見へます

けれども、内容に至つては、さう違つて居るものではありません。唯だジェヴォンスは、生産要具及生産材料を資本と見ないで、單に勞働者の生活用品のみ、即ち勞働者が生計を支ふる爲に消費するものゝみを資本と認めるに對して、通說に於ては單に勞働者の生活用品のみならず、生産材料並に生産要具も之を資本と名づけると云ふ違ひがあるだけであります。

ジェヴォンスとマルクスの默契

此點に於てジェヴォンスの說は、マルクスの說と餘程默契する所があるのであります。マルクスは資本に不變資本と可變資本との區別を立てました。其事は後に至つて詳しく申上げますが、一寸其要領だけを申すと、マルクスの不變資本と云ふのは、生産材料及生産要具のことで、可變資本と云ふのは勞働者の生計を支ふる所のものを指して云ふのであります。而してマルクスは、價値の增加は唯だ可變資本のみ之をなすのであつて、不變資本は、費やした價値を取返すに過ぎない、決して價値を增すものでないと申し、從つて之を不變資本と名づけました。可變資本だけが殖える、即ち變ずる所のものであると申すのであります。ジェヴォンスが、勞働者の生計用品のみが資本であると言つて居るのは、マルクスが可變資本のみが增加する資本であると言つて居るのと餘程接近して居るのであります。

ジェヴォンス說捨つ可からず

ジェヴォンスは頭腦優秀の人であると共に、或る點から見れば一種旋毛曲りのことを言ふ人として知られて居りますけれども、彼れの資本の定義は、決して旋毛曲りの定義ではありません。畢竟するに資本の本質を求めて、專ら資本が勞働者をして、生産

期間中生計を維持せしめると云ふ點に之を見出したのであります。通說に於ては、單に勞働者の生計維持のみでなくして、其生產に當つて要する物の總てを資本と認めます。勞働者が其能率を十分に發揮する爲に要する所の機械や器具、其他一切の設備、又勞働力作を施す所の對象たる原料・材料となる財の蓄積も資本であると認めるのであります。食料品は無論之を食つて直ちに消費します。衣服も段々消耗します。原料は其形を失はなければ原料たる役をなさないものであります。機械や器具は、中には一度で其形を失ふものもありますけれども、大抵は段々使用して行く中に、或は毀損せられ、或は消磨せられて、早晩形を失つてしまふものであります、兎に角消費することの出來ないものは、通說で謂ふ所の生產の用を爲すことの出來ないものであります。でありますからジェヴォンスの言ひ方は、例へば生れると云ふことは既に一歩死に近づいたものであると云ふが如くに、反語的に右の點を强く言ひ現はした

に外ならないのであります。ジェヴォンスの說にしましても、通說に致しましても、財の蓄積と云ふことを前提として居つて、之に或る限界を附けやうとしたことは、全く共通であります。何れも資本生產力說に屬するものでありまして、ジェヴォンスは決して其以外に出て居る者ではありません。今日に於ては、ジェヴォンスの說は大いに參考にはなりますけれども、一般には認められて居らないのであります。

通說維持し難し

一般に認められて居る所の通說に於きましては、資本は第一には、財の蓄積であり、第二には、其財の蓄積は、生產に當つて勞働を補助し、又勞働者を維持すること、此二つが資本の本質であるとし、これが資本生產力說の二大支柱となつて居るのであります。之を言ひ表はすに用ゆる言葉は、學者に依て色々違つて居りますけれども、

根柢の思想は此外に出でないのであります。之に對して實際社會の事實はどうであるかと見ますと、資本の働きたる、決して財の蓄積として、又生産に當つて勞働を補助し、維持すると云ふことには存して居ないのであります。資本の本質は全く別の點に存して居ります。何となれば財の蓄積であると云ふと、又勞働の維持者であり、補助者であると云ふことは、何故に資本に利息と云ふものが附くかと云ふことを少しも説明することが出來ないのであります。利息の本質に就ては、何れ後段に至つて詳しくお話申上げますが、今日一般に行はれて居る所の解釋は、前にも一寸申した通りに、資本は生産するものである、故に資本は利子を生むものであると云ふ生産力説であります。是は畢竟するに、資本は財の蓄積なり、勞働の補助者なり、又維持者なりと云ふ定義に拘泥して居る所から、此の如き無理な牽强説が出て來たのであります。所が此説では、到底利息の本質を説明するに足らず、從つて又資本の本質も明かに説明す

ることが出來ないことは、段々人の注意する所となりまして、色々の新しい説が出て居りますが、其中で最も周到綿密の研究を致したのは、前にも申したボエーム・バヴェルク氏の資本及利息の研究でありまして、彼れは其研究の結果、資本時差説なる一新説を案出致しました。其意味は凡そ次の如くであります。

バヴェルクの價値時差説

資本に對して利息の生ずるは、現在の財と、將來の財との間に、價値の違ひがあるからである。同じ財ならば、現在に於て直ちに消費に充てると云ふことが一番多くの價値を有つて居るのであつて、時を經るに從つて其價値は輕減して行くものである。即ち時の相違から起る所の價値の差と云ふものがある。人間は他の事情同じき限りは、現在の財に最高の價値を附し、將來を之に對して割引するものである。故に生産

の初めに當つて、例へば一萬圓の資本を投じて、一箇年の後に其生産が完成して、矢張り一萬圓の資本が回收せられたと云ふのでは、其人は損をして居るのである。何となれば、現在に於ける一萬圓と、一箇年後に於ける一萬圓とは、時差から起る所の價値の差があつて、決して同一の價値を有つて居るものではない。現在一萬圓を投じたに對しては、一箇年後に於て一萬圓に加ふるに何物(X)をか回收するのでなければならぬ。其X とは、即ち一萬圓の一箇年間の價値の減少を補ふ高、是である。此X が即ち利息である。故に今一萬圓投じたに對して、一箇年後に一萬一千圓の金が回收せられた時には、是は時差が一割となつたのである。此場合には一割の利息が付いたと言ふのである。若し此利息なるものがなければ、價値多き現在の財を捨てゝ將來の財を取る者は誰れもない。即ち人は今在る所の財を現在直ちに消費してしまつて、之を將來まで保持すると云ふことをしないであらう。さうなれば生産の發達と云ふことがな

い。ソコで此時差を補償する爲に、利子と云ふものが存在する、是が利子存在の理由であると申すのであります。換言すれば、利息と云ふものは財の使用の上に於ける時間の代價である、一箇年と云ふ時間を待つたに對して、一萬圓に對して一千圓と云ふ代價が支拂はれるのであると、斯う申すのであります。

右説は生産力説の維持し難きを示す

此説には反對論も隨分ありますけれども、又賛成も多いのでありまして、近來に於ける有力なる一の説と看做されて居るのであります。然るに、バヴェルクが此の如き説を唱へると云ふ、其事が既に資本生産力説の維持すべからざるものであることを有力に證明して居るのであります。バヴェルクは、資本の定義に於て、私的資本、社會的資本の別を設けて、私的資本は收益力を以て本體とするが、社會的資本は生産力を

以て本體とすると言ひながら、利息の説明の場合に於ては、全然生産力説を打棄てゝ居るのであります。それなら收益力説を採つて居るのかと云ふとさうでもないので、即ち其何れにも付かない所の、資本時差説なるものを案出して居るのであります。其説の當否は別として、兎に角彼れは生産力説を以て滿足しないのであります。資本には生産力がある、其生産力に對する報酬が利息であると云ふ通説を以て滿足しないからこそ、此の如き新しい企てを案出したのでありまして、氏の此説が多くの贊成者を得たと云ふことは、少なくとも是等の贊成者の間に於ては、資本生産力説が十分に滿足を購ひ得て居らないと云ふ證據であります。バヴェルクの説は、此點に於ては大に有力なるものと信じます。即ち從來長く行はれて居つた所の資本生産力説を、反面から打破したと云ふ功勞は、十分に認む可きであります。

時差説の積極的効績は認め難し

併ながら彼れが積極的に打立てた時差説なるものは、實を申すと甚だアッケないものと言はなければなりません。畢竟するに利息を以て一の待賃であると見るのであります。恰も車夫がお客を乘せて走つて行つたが、お客が用を足して居る間は、走らずに待つて居つた、ソコで走つた間の賃錢を貰ふのみならず、待つて居つた間の、一時間五錢とか十錢とか云ふ待賃を貰ふ如きもので、資本其ものは、生産上別に何にも用をなさないでも、資本の所有者が時間を待つて、今直ぐに使ひたいものを一箇年なり二箇年なりの後まで我慢して待つたと云ふことに對する待ち賃が利息であると云ふのでありますから、之を名けて利息待ち賃論（或人は利息の期待性と名けます）と稱しても宜しいのでありまして、學問上の説としても、亦實際上の説としても洵に根

據の薄弱なるものと言はなければなりません。私は斷然此說には贊成することが出來ないのであります。唯だ資本生產力說の甚だ賴むに足らないものであると云ふことは、此の如き タワイもない說が、最新の研究、又最有力なる一研究として勢力を得たと云ふ事に徵しても疑ひを容るゝの餘地がないものと思ふのであります。

收益と生產とは必しも相伴はず

抑々資本に利息が付くと云ふことゝ、資本に生產の力があると云ふことゝは、決して當然相伴ふものではありません。何となれば生產に何等貢獻することがない場合でも、利息は拂はれるのであります。又生產に貢獻することが甚だ大であつても、一向利息が付かないか、若くは極めて僅かの利息しか付かない場合が幾らもあります。でありますから、抑々利息の付くと付かないとは、生產の有無に直接の關係がないのみならず、其生ずる所の利息の多少は、決して資本の生產力の大小を言ひ現はして居るものでも何でもないのであります。

普通の經濟學の書物に能く書いてある樣に、他人に貸付けた資本は、借手が之を酒食に費消してしまつて、何等生產に寄與しない場合であつても、其借りた資本に對しては、利息を拂はなければならぬのであります。『私は貴方から一萬圓拜借致して事業を始めましたけれども、其事業は悉く失敗に終つて、何等生產が上りませんから、利息は上げられません』と言ふことは決して出來ません。生產が悉く失敗に歸しても、借主は當然利息支拂の義務を有つて居るのでありまして、此場合に借りた金は、資本でないと云ふ譯には決して參らないのであります。唯だ普通の說に於ては、是は個人的に見れば資本であるが、社會的、國民經濟的に見れば資本でないと申すのであります。貸した人から言へば、利息が取れるのであるから資本である、故に是は

私的資本である。併し國民經濟上の資本と云ふものは、生産をするものでなければならぬ。然るに此場合の資本なるものは、何等の生産をして居らないから、是は社會的、又は國民經濟的に見れば、決して資本ではないと言つて説明するのであります。

國民經濟的資本必ずしも生産せず

併し是は甚だ無理にして且つ無用なる分け方と言はなければならぬのであります。例へば日本が支那の借款に應じて、巨額の金を貸します。貸す方の日本は、之を以て支那の産業を振興せしむる爲に使つて貰ふ積りであると致しましても、支那の政治家が、或は私腹を肥す爲め、或は無用な戯ごつこの爲に、之を使つてしまつて、何等の生産をも興さなかつた場合と雖も、日本は此資本に對して支那から約束したゞけの利息は必ず請求します。日本と云ふ國民經濟から見ても、日本の社會的經濟から見ても、此場合に於ける借款は資本でありません。併ながらそれは何等生産の用をなして居るのではありません。故に社會的資本は必ず生産の用に供せられるのが本質であると云ふことは言へないであります。私人の立場から見た資本は、生産の用と云ふことに就ては關係がなくても差支ないが、社會の立場から見た資本は、必ず生産の用をなすものでなければならぬと云ふことは、一寸考へると尤もな説明のやうに聞えますが、よく〳〵考へて見ますと、右の様な大なる矛盾を含んで居るのであります。

資本の補助的任務の謬想

資本生産力説を採りましても、資本の生産力と云ふものは、勞働の生産力とは大分趣きが違つて居るとは、通説も亦之を認めて居るのであります。即ち通説に於ても、

資本の生産力は補助的のものであると解釋して居ります。獨立のものではないのであります。生産に當つて勞働者を維持し、勞働を補助すると云ふことが其本質であると申すのであります。でありますから、何處迄も勞働と云ふことから離れて、資本の生産力と云ふことは考へられないことになつて居ります。所が此補助的任務と云ふものは、實は資本が資本として盡す所でないのであります。勞働を補助するものは、或は原料なり、或は生産用の器具・機械なり、其他の設備なりと云ふ、具體的の物件であります。して、資本其ものではないのであります。例へば土地を國有にしてしまつた場合は勿論、もつと進んでマルクス等の主張する樣に、生産要具を悉く公有にしてしまつた場合に於きましても、原料品なり、機械器具なりと云ふものは、決して無くなると云ふ譯のものではありません。而して其が生産に當つて、勞働を維持し補助すると云ふ働きは少しも變るものではありません。併ながら此場合に於ては是等は少しも

資本と云ふ形を取らないのであります。人間社會に於て、是等の生産材料、若くは生産要具が、資本と云ふ形を取つたと云ふことは、其長い歴史の上に於ける、唯だ或る時間にのみ限られて居ることでありまして、昔に於ては、長い間是等のものは資本と云ふ形を少しも取ることなくして存在して居つたのであります。而して其時代に於ても、其の生産上に於ける任務と云ふものは、少しも異らないのであります。

生産を補助するものは財の蓄積なり資本に非ず

生産を助けるものは財の蓄積であります。此點は如何にも通説の説く通りでありますが、唯だ其財の蓄積を直ちに目して資本なりとすることは、論理上非常に飛越して居るのであります。成程今日に於きましては、勞働の補助をなし、勞働の維持に充てられるものは、皆資本の形を取つて居ります。併しそれは唯だ今日の社會の狀態に於

て、資本の形を取つて居ると云ふだけであつて、此が直ちに本質上の資本であると云ふことは言へないのであります。手近い例を採つて申上げて見ますと、今日の世の中に於ては、日本國民は必ず一生の中、或る年限の間は學校の生徒である。學校生徒であつたことのない人は寧ろ例外に屬することになつて居ります。此事實を見て直ちに速斷して、日本國民は皆學校生徒なりと云ふことは、到底言へないのであります。學校生徒であると云ふことは、日本國民の一生の或る時期に限つて居ることでありまして、學校の生徒で無い人でも、必しも教育のない人、紳士たる資格のない人とは言へません。又昔に於ては、日本國民は學校生徒たる者は殆ど無かつた。併し其時分と雖も、日本國民は國民にあらず、日本國民は人間にあらずと云ふことは決して言へないのであります。唯だ今日に於ては、國民たる資格を十分に備へやうとするには、學校教育を受くることが一番適當の方法であると認めて、國家が就學の義務を國民に負はせ、又國民は義務就學年限以上に、進んで學校教育を受けるのであります。併ながら何かの變動に依て、現在の學校と云ふものゝ形が變りましたとても、國民に教育を授ける途が全くなくなつてしまふと云ふ譯ではありません。即ち日本國民たると云ふことゝ、學校の生徒たると云ふことゝは、必しも當然に伴つて居るのでなくして、唯だ今日に於ては、國民の生活の或る時間に亘つて、日本國民たると云ふことゝ、學校の生徒たると云ふことが、相伴つて居ると云ふに過ぎないのであります。其如くに今日に於ては、生産の用に供せられる財が、或る時期の間、資本と云ふ形を取ると云ふに過ぎないのであります。昔に於ては、必ずしも資本の形を取らなかつたし、今日に於ても只今申上げました樣に、資本の形を取らなくても、其生産の用に於ては、少しも變りがないのです。況んや將來に亘つて、必ず資本の形を取らなければならぬと云ふことは、決して斷言が出來ないのであります。

單に現在に於て一致するのみ

前に擧げた例で繰返して申上げて見ますれば、資本が利息を生ずることは、恰も母たる如きものである。母と云ふ者は、大抵同時に人の妻であります。乍去母たる資格と、妻たる資格とは、決して同一なものではありません。唯だ多くの場合に於て一致して居ると云ふに過ぎません。而もそれは、今日現在の社會制度の下に於て一致して居ると云ふに過ぎないのであります。併ながら今日の婚姻制度の下に於きましても、必しも妻たらずして母たる者あり、母たらずして妻たる者も幾らもあるのであります。昔は今日のやうな一夫一婦の婚姻制度が必しも一般に行はれて居つたのではありません。或は一夫多婚の制度もあり、又場合に依ては亂婚狀態も或る地方には存して居つたのであります。斯かる場合に於きましては、母たる資格と妻たる資格とは全く別でありまして、妻たらずして母たる者が多くあるのであります。例へば前に例に引きました飛驒の白川の如きに於きましては、今日でも大抵の婦人は皆母であります。けれども、其中で妻たる者は一家に於て僅かに一人若くは二人しかないのであります。其如くに、財の蓄積であつて、さうして生産の用に供せられると云ふことゝ、資本たると云ふことゝは、今日に於ては大抵提携して居ると云ふに過ぎないのであつて、必ずしも常に同一なりとは言へないのであります。

フィッシァーの復古的資本論

チュルゴーは單に財の蓄積でさへあれば總て皆資本であると云ふ說を唱へましたが、其後此の如き定義を資本に下す人は殆どなくなりました。然るに此頃になつて、死んだ灰が再び燃え上つて、資本に此種類の廣い觀念を認むる人が出て參りました。それ

は亞米利加の學者のアヴィング・フィッシャーと云ふ人であります。此人の說に依ると、財の蓄積の中に、資本たるものと、資本たらざるものとの區別などはない、苟くも財の蓄積（フィッシャーは財と云ふ中に人間迄も包含させて居ります）であれば、それは皆資本である、それ故に取分けて資本たるものと、資本たらざるものとに區別することは當を得て居らぬ、富即ち資本である、唯だ資本と區別せらるべきものは、資本の所得即ち是れであると申します。又資本は一の源本であつて、之に對して流動的狀態にあるものは所得である、時間の上から見たものは資本であつて、時點の上から見たものが所得である。資本に對立するものは、非資本ではなくして所得であると申します。此說は寧ろ非常な退步でありまして、贊成する人は餘り澤山はありません。私自らも此說は全然採らないものであります。併ながらフィッシャーが此の如き退步的の說を、一の新しい說として出すに至つた動機は、財の蓄積と云ふことを前提として之に限界を附けようと色々解釋が試みられるけれども、其限界を附けると云ふことがどうしても的確に行かない、ソコデ是は寧ろ限界を撤去してしまつた方が宜い、出來ない相談をするよりは、全然廢して、總て財の蓄積を富と認めた方が、論理上矛盾が取り除かれて宜いと心付いたからではないかと思ふのであります。ソコデ私は前にバヴェルクの說に就て下したと同じ評言をフィッシャーの說に對しても下したいと思ひます。即ちフィッシャーの積極的の說には贊成することは出來ませんけれども、此の如き說が出て來たと云ふことは、財の蓄積と云ふことを本として、之に色々の限界を付けると云ふことが學問上甚だ困難であり、又それを敢てして見た所で、必しも萬全の說明とならないと云ふことを、反面的に證據立てゝ居るものと思ひます。

資本たるや否やは主觀的にのみ定めらる

財の蓄積と云ふことは、自然的の事實であります。之に反して生産の用に供せられると云ふことは、畢竟するに人間の心理に於ける主觀的觀念に外ならないのであります。或る財の蓄積があつて、之を生産の用に供すべきか、供すべからざるかと云ふことは、財其ものにあるのではない。之を生産の用に供すべきか否かと云ふことは、人間の心が之を定めるのでありまして、其心たる、常に變るものであります。又一たび生産の用に供すると定めたものでも、後に其心を變ずることが幾らもあるのであります。心を變ぜずして生産の用に供して居りましても、果して生産に役立つたか否かと云ふことは、結果を見なければ分らないのであります。さうすると、自然的の具體物たる財の蓄積に、人の心理的決定を與へて、而して生じた所の具體的の結果を見て、初めて資本であるか否かと云ふことが定まるのであつて、極めてヤヤコシイ筋道を辿るものであります。併し資本が財の蓄積であると云ふことが、動かすべからざる事

實であるならば、吾々は此の如きヤヤコシイ論理を辿ることも之を辭することは出來ないのでありますけれども、左樣なる骨折をして見た所で、抑々出立點が間違つて居れば、それは勞して効なきものと言はなければならぬのであります。是れ即ちクラークが資本と資本財との區別を力說する所以であります。具體的の有形物たる財の蓄積は、資本ではなくして資本財である。資本は左樣なものではない、資本は抽象的の觀念である、價値の基本が眞正の資本であつて、財の蓄積は、唯だ資本財たるのみであると云ふ說を立てたのは、畢竟右の前提の維持すべからざることを看破つたからであると思ひます。

從つて具體的列擧は無意味

資本は財の蓄積なりと云ふ出立點が、當を得て居るか否かと云ふことを吟味しやう

と云ふには、直ちに其事に就て論ずるよりも、生産の用に供せられると云ふ方から、逆に溯つて行つた方が宜いと思ひます。生産の用に供せられると云ふこと、是が資本たるや、たらざるやを定める標準とせられて居るのでありますが、之を假りに正しいとして見ますと、何が資本であるかと云ふことを、具體的の物に就て言ふことは全然出來ない筈であります。能く經濟學の書物に、資本の種類左の如しとして、機械、器具、道路、橋梁、家屋、原料品、商品、土地若くは土地に加へられたる改良、灌漑、疎水、運河、港灣、堤防、工場、其他雜多なものを列擧してありますが、是は頓でもない間違であります。或る機械が資本たるやたらざるやと云ふことは、通說に從ひましても、それが生産の用に供せられるか否かに依て定まるので、完全なる機械が其處にあつても、それが生産の用に供されなければ、資本ではないのであります。だから機械が資本であるとも、資本でないとも言へません、或る條件の下に於てのみ、

其機械は資本たるのであります。其狀態、其條件は、之を生産の用に供すると云ふことであると通說は說いて居るのでありますが、それは即ち主觀的の決定に外ならないのであります。

例を以て說明すれば

例へば私が此處に百坪の地所を所有して居ります。私は之を自分の庭園として、自分の娛樂の用に供することも出來ます。或は之を工場の敷地として、其處に工場を建てゝ生産を營むことも出來ます。庭園として使用した場合には、其百坪の地所は所謂享樂財でありまして、決して資本ではないとは、總ての學者が一樣に認むる所であります。之に反して工場の敷地として用ゐますれば、其百坪の敷地は資本であります。然らば其百坪の地所は、資本であるかないかと云ふことは、地所其ものに備は

つて居る性質でも資格でも何でもないのでありまして、單に持主たる私の意志に依てのみ定まるのであります、でありますから、今迄工場用の敷地として用ゐたものも、工場を取拂つて之を庭園として用ゆるようになれば、其の地所は資本たる性質を失つてしまふのであります。反對に庭園を變じて工場の敷地とすれば、今迄資本たらざるものも、其時から資本たる資格を備へるようになるのであります。財の蓄積が資本たる資格を與へられるのも、奪はれるのも、自分の力に依るのでなくして、其所有者、其使用者の意志にのみ依るのであります。

ミルの資本區別論

通說の資本論を最も明瞭に說いた所のジョン・スチユアート・ミルは、資本と資本でない者との區別は、普通財の種類に存して居るのではなくして、所有者が之を資本として用ゐようと決定する、其意志目的に存して居るのであると申して居ります。此說は可なり多くの學者が認めて居るのであります。近頃になりましても、例へば獨逸の學者のヂーツエルの如きも、資本たる資格は物其ものに存するのでなく、之を生產の用に供せんとする人の目的に依て附與せられるものであると申して居ります。其他シエフレやシュモラ！なども同樣のことを唱へて居ります。

財の蓄積ならざる資本

即ち通說の通りに考へて見ましても、資本の資本たる所以は、人の意志が之を定めるのでありまして、純然たる一の主觀的事實であります。之に對して財の蓄積であると云ふことは、單に附帶事項たるに過ぎません。否現に通說に於ても、財の蓄積でないものでも、人が之を生產の用に供すれば、資本となると云ふことを說いて居る者が

少なからずあります。例へば權利の如きもの、人事關係の如き、得意とか、暖簾とか、株とか、信用とか、又は意匠の如き是れでありまして、殊に專賣特許權の如きは、どうしても之を資本と認めない譯には行かないのであります。而して是は有形物の蓄積でないことは言ふ迄もありません。即ち有形物の蓄積であると云ふことは、必しも資本が備へて居らなければならぬ實質でないと云ふことは、是でも明かであります。

生産の用の眞意

又生産の用に供せられると言ひましても、抑々何の爲に生産の用に供するかと云ふことを考へて見なければなりません。私が百坪の地所を有つて居つて、之を自家用の庭園としないで、工場敷地とすると云ふのは、庭園として眺めて居るよりも、經濟上有利であるからするのであります。生産の用に供して何等の利益がない、若くは利益があつても、庭園として眺めて居る程の利益がないものならば、之を生産の用に供すると云ふことは、誰れも致しません。社會公益の爲め、國家の爲めに庭園を提供すると云ふことは、あることはありませうが、それは原則ではありません、例外であります。吾々の經濟上の行動は、直接自家に經濟上の利益がある、即ち利用が增すからするのであります。所で利用が增すと云ふことは、資本に就ては、利息を生出して見て、初めて知れるのであります。庭園として眺めて居る場合には、貨幣價値を以て之を計ることは出來ません。私が百坪の庭を有して居るに依て、何圓の利用を得て居るかと云ふことは、大抵の場合には勘定が出來ないのであります。然るに之を工場用の敷地として用ゆる時には、其利用と云ふものは明瞭に貨幣價値を以て計れるのであります、又計れるのでなければならぬのであります。即ち百坪の地所を以て工場を建て、經營した爲に、一箇年に何萬圓なりの利益を得たと言ふ、具體的の貨幣價値の增

加があつて初めて生産が擧つたと云ふのであります。之を他の言葉を以て言つて見れば、所得が出て見て、初めて生産の用に供したと云ふことが歴然たる事實となるのであります。百坪の地所を工場用敷地にする目的は、貨幣價値に積られる所の利益を得ることにあるので、其手段として地所を工場用敷地にすると云ふに外ならないのであります。即ち有形的の物質であると云ふことは、偶々貨幣價値に積られる利用を得る手段として、意味をなして居るに過ぎないのでありまして、是は資本の本質ではないのであります。

貨幣價値に見積らるゝ利用

でありますから、有形の物質は其形を變へずにして置いても、他により以上の貨幣價値に積られる利益のある方法があれば、或はそれを取ることもあります。手近な例を

擧げて見ませう。前にも擧げた例でありますが、例へば紡績會社が紡績絲を澤山作つた爲に、絲の値段が下つて、却つて利益が薄くなると云ふ場合には、繰業の短縮、生産の制限をなして、成べく絲を作らないやうに致します。或は又朝鮮人蔘の例を以て説明したやうに、現に存在する財の蓄積を燒捨てゝ、之を減少せしめたと云ふ場合もあります。其方が、貨幣價値に積つた利用が餘計あれば、さうするのであります。社會の關係に於て、貨幣價値の利用を得て來られさへすれば、それで資本たる實は十分備つて居るのでありまして、畢竟人事の上に於ける一種の關係に外ならないのであります。或る人が華嚴瀑を獨占してしまつて、此瀑を見物しようとする者は、一人に就て料金を十圓づゝ拂はなければならぬとすれば、其人は華嚴瀑を所有する爲に澤山の利益を擧げるのであります。此場合には華嚴瀑は彼れに取つては資本であります。然るに華嚴瀑は過去勞働の結果でもなければ、財の蓄積でもありません。唯だ人事上の

關係に於て、之を獨占してしまひさへすれば、利益が得られ、而して華嚴瀑は資本となるのであります。反對に或る人が莫大の經費を投じて、人造の瀑を拵へ、即ち過去の勞働を其處に蓄積して、さて觀覽料を取つて之を見せようとしても、是は華嚴瀑に比ぶれば遙かに詰らぬものであると言つて、誰れも見に來ないとなれば、其所有者は之に依て何等の利益も擧げることが出來ません。即ち非常に多く過去勞働を蓄積したもの、又有形の物財を其處へ蓄積したものであつても、何等の資本とはならないのであります。故に資本は生産せられたる生産財であるなどゝは、決して言へないことであります。是だけを以て、資本は財の蓄積であると云ふことの誤りなることは略々明瞭となつたと存じます。

資本と私有財産制度

偖て、然らば右の財の蓄積と云ふことの外に、資本の眞正なる本質は何であるか、人の意志が資本なる資格を附與する所の目的物は何であるか、如何なることが共通の事實であるかと申しますと、それは一種の人事關係と答へる外はありません。人事關係、又言ひ改めれば、社會上の關係であります。社會上の關係と云ふのは、社會の制度に依て生出されたものであります。其制度と云ふのは、前にも説明したことのある私有財産制度、即ち是れであります。私有財産制度がなければ、人が資本として用ゐやうと云ふ意志を或るものに附與することがテンデ出來ないのであります。總ての物が共有物でありますれば、生産の材料となり、又は生産の要具となり、勞働者の生活維持の手段とはなりますけれども、資本とはならないのであります。其意味を以下少しく説明して見ませう。

貨幣は資本に非ず

元來資本の觀念は、元金と云ふことであります。元金と云ふことは、利息を生出す本であつて、而して一定の貨幣額、即ち貨幣價値の或る數量であります。日本で申せば金何圓、英吉利で言へば何磅、亞米利加で言へば何弗と言つて計上せられる所の額であります。メルカンチリズムの時代には、或る學者は此貨幣の額と、貨幣其ものとを混同して、資本は即ち貨幣であると主張したのでありますが、これは無論大なる間違であります。併し今日の經濟學の通說に於ては、資本即ち貨幣ではないが、併し貨幣は資本であると主張する論者が少なからずあります。是れ亦誤りであります。貨幣は決して資本ではないのであります。如何なる意味に於ても、貨幣其ものは資本たることはありません。貨幣の一定の額に依て言ひ表はされた所の價値が資本であるので

す。是が資本は元金なりと云ふ本當の意味であります。一定の貨幣の額と言ひましても、其處に積んである貨幣の數量ではなく、貨幣價値の數量であります。百圓紙幣が百枚、是が資本であるのでは決してない、一萬圓と云ふ貨幣價値が資本であります。一萬圓と云ふ貨幣價値を具體して居るものは、百圓紙幣百枚のこともありませう、又一通の手形であることもありませう、或は若干噸の商品であることもありませう、或は何坪かの地所であることもありませうが、それは少しも問ふ所ではないのであります。貨幣其ものが資本でないことは、土地なり、家屋なりが、土地家屋其ものとして決して資本でないと同じことで、少しも其間に差違は存しません。財の蓄積であらうが、具體的の有形物であらうが、無形の人事關係であらうが、それが一定の貨幣價値を有して居る、即ち貨幣價値の一定額を以て言ひ表はすことが出來ると云ふことが、資本の本體でありまして、一定の貨幣價値を有するもの皆資本であるのではありませ

ん。

資本には數量的增減あるのみ

通說に於て、財の蓄積と云ふ前提から出立して、之に或る限定を加へて資本とするが如くに、吾々は一定の貨幣價値の額を資本と認むるに就ては之に或る限定を附與しなければなりません。通說に於きましては、生產の用に供せられると云ふことを、限定の標準と致して居りますが、貨幣價値に就ては、生產の用に供せられると云ふことは決して言へないのであります。吾々の經濟生活に於て、貨幣價値は決して其品質を變へるものではありません。變化し得るものは唯だ其額のみであります。即ち數量的に增減し得るのみで、品質的に變化することのないと云ふことが貨幣價値の特色であります。

マルクスの語を以て言へば

マルクスの言葉を以て言へば、G が G^1 になり得るのみであります。唯だ其 G を G^1 にするに就ては、中間に於て色々形は變ります。併し幾ら中間の形が變りましても、結局は G が G^1 になる外はないのであります。資本として用ゐられた一定の貨幣額は、唯だ其額を增すことに依てのみ資本となるのであります。即ち前に申した利息を生むと云ふこと、是れであります。利息も、矢張一定の貨幣額であります。蛙の子は蛙と云ふが如くに、資本の子は矢張資本であります。人間は人間しか生むことは出來ません。人間が馬を生むことは決してないのであります。其如くに、一定の貨幣價値額たる資本は、一定の貨幣價値額たる資本を生むだけでありまして、其他には何も生むことが出來ないものであります。即ち G が G^1 になると云ふのは G＋ロ G

になると云ふことに外ならないのであります。

實際の事實を以て說明す

此事は實際の事實に就て說明して見れば直ぐに分ります。勞銀や地代は、勞働や土地と同じものではありません。地代は決して一定の何坪の土地ではありません、穀物何石とか、或は金何圓とかであります。勞銀も、何時間の勞働ではありません、一日の勞銀金何十錢とか、若くは米何升とかであります。勞働とはまるで違つたものが、報酬として與へられるのであります。然るに利息は、必ず元金と同じく、一定の貨幣額であります。それ故に利息ばかりは常に割合を以て言ひ表はします。利息一箇年に付て一割とか、一割二分とか言ひます。地代や勞銀は決してさう云ふことは言ひません。勞働者一箇年の勞銀一割なり、一坪の地代五分なりなどゝは決して申しません。

尤も地代は、さう云ふ樣に言へないことはありません。例へば一坪の地價が三百圓として、一箇年の地代が三十圓であるとすれば、地代は一割であると言つて言へないことはありませんが、實際に於てさうは言ひません。一坪の地代三十圓也と、實數を擧げて言ひます。是は畢竟利息と云ふものは、資本と同じ貨幣額でありますから、何も其實數を擧げる必要はない、割合を擧げさへすれば直ぐに分るからであります。是は日本に於ても西洋に於ても共通でありまして、日本が西洋の眞似をして、利息を割合で言ひ表はすやうになつたのではありません。昔からさう云ふ風に言つて居つたのであります。勞働は强いて之を金額に見積れないことはありません。勞働者を貨幣價値に引直して見れば、凡そ幾らに當ると云ふことは言へないことはありません。現に亞米利加のフィッシャーの如きは、人間をも一の富と見て居るのでありまして、人間一人の金額、即ち貨幣價値は、凡そどの位であるかと云ふことを論じて居ります。併し

是は一般には認められて居りません。又其様にすることは、甚しく人間の威厳を損ずるので、私共は之を健全なる思想と見ることは出來ません。實際に於てもそんなことは申して居らないのみならず、又用のないことであります。でありますから勞銀を割合を以て言ひ表はすと云ふことは、縱んば出來ても、無用のことであります。土地の方は、前に申す通り出來ないことはありませんが、是れ亦致して居りません。獨り資本と利息に就ては、常に割合を以て言ひ表はし、又利息のことを考へる時には、常に割合で考へて居ります。之を以て見ても資本は一定の貨幣額であると云ふことには一點の疑ひを容れることが出來ないのであります。

貨幣價値額の增殖が資本の本質

故に、吾々は之に定義を下して『資本とは一定の貨幣價値額であつて、其所有者に

新しく貨幣價値額を付加へるものである』と言つても宜いのであります。簿記に就て言へば、是は直ぐに分ります。簿記の勘定の一番初めは、資本金勘定で始まるのでありますが、其資本金勘定を具體化して居るものは、或は商品もありませう、或は機械もありませう、或は手形もありませう、色々のものがありませうけれども、總て之を締め括つて、金何萬圓、金何千圓と計上致します。簿記の貸借對照表には、決して地所が何坪、商品が何百個、機械が何百臺と云ふ風には記しません。資本金何萬圓也、何千圓也と擧げます。故に我が商法では、此外に別に財産目錄なるものを作ることを命じて居ります。財産目錄に於きましては、資本を具體化して居る所の實物を列擧するのでありまして、工場用の敷地が何坪、建物が幾棟、貯藏品が何程と云ふ風に別けるのでありまして、是は貸借對照表とは別のものであります。然るに能く新聞の廣告などにあるのを見ますと、『財産目錄は貸借對照表資産勘定と同一に付き之を略す』

など、書いてありますが、是は甚だ間違つたことであります。商法の規定の精神は、貸借對照表に於ては、貨幣價値の説明を求め、財産目録に於ては、實物の説明を求めて居るのでありまして、財産目録が資産勘定に同じであつてはならないのであります。

換言すれば利殖即ち資本の本質

資本が一定の貨幣價値額であると云ふことは、是れでお解りになつたらうと思ひますが、右の定義に於て、『其所有者に更に新なる貨幣價値額を加へるもの』と言ひましたのは、一言で申せば利殖と云ふことであります。故に右の定義を短かく言ひ改めますれば、『利殖の用に供せられる一定の貨幣價値額を資本と謂ふ』と申して宜しいのであります。利殖とは一定の貨幣價値額を數量的に殖やすことであります。此事を學問

上では『同種の倍加』Multiplication of the kind と申します。貨幣價値額が貨幣價値を殖やすのでありますから、同じものが殖えるのであつて、土地や勞働の如き『異種倍加』とは違ふのであります。

利殖と生産

即ち通説に於て、資本は『財の蓄積』であると云ふに對して、私は資本は『一定の貨幣價値額』であると主張し、又通説に於て『生産の用に供せられる』と云ふのに對して、私は『利殖の用に供せられる』と云ふことを主張するのであります。一定の貨幣價値額は、財の蓄積であることもありませうし、さうでないこともありますが、今日に於ては、最も多くの場合に於ては、兩者相伴つて居ることは、無論否定することは出來ません。其如くに利殖の用に供せられると云ふことゝ、生産の用に供せられ

ると云ふことゝは、必しも一致するものではありませんが、今日の實際の事實としては、大多數の場合に於て此兩者は伴つて居ります。即ち資本を利殖しやうと云ふには、生産の增加が之に伴ふのが常であります。生産の增加を來すと云ふことがあつて、利殖の目的が達し得られるのが通例であります。併ながら生産の用に供せられると云ふことは手段であつて、目的ではありません。目的は利殖を圖ると云ふことにあるのであります。生産するから利殖が出來るのでなくして、利殖したいから生産するのであります。

利殖本位の經濟組織

是は言葉の上の相違のみに止まる樣に聞えるかも知れませんが、決してさうではありません。此間の區別を最も嚴重に致さない爲に、非常に思想の紛亂を惹起して居るのであります。併し、是が果して人生の眞の幸福に合致するや否やと云ふことは、別問題であります。否、私の考へでは、今日は最早利殖本位の經濟組織の弊害に堪えなくなつて來たと言つても宜しいのでありまして、生産は單に手段であり、目的は何處迄も利殖であると云ふことは、必しも眞に人生の幸福と合するとは言へないと思ひますが、それは理想でありまして、實際の事實は、目的は一に利殖にあつて、生産にはない、生産は何處迄も單に手段たるに過ぎないのであります。何故ならば、生産は國家社會が之を營むものでなくして、自家の利益を立場として居る所の個人が之を營んで居るからであります。無論是が合して國の生産とはなりますけれども、併ながら生産の實行は、夫れ〳〵個人が分れてやつて居るのであります。官營事業の如きも、國全體が之を營む樣ではありますが、矢張りそれは一の特殊經濟としての國が營むのであります。即ち個人の資格でなすのでありまして、國全體の生産ではないので

あります。總て個人即ち特殊經濟として生産に從事するのでありますから、各々自己の利益を增す爲に生産をするのであります。國に是れだけの米が必要である、是れだけの生絲が必要であるから、儲かつても儲からなくても、之を生産しなければならぬなどゝ言つて生産する者は一人もありません。生産事業を營めば、是だけの利益が上る、紡績工場を立てればどれだけの貨幣價値の增加が見られると云ふことを目的として、其目的を達する手段として生産を營むのであります。從つて、必しも澤山のもの、必しも品質の良好なるものを作ると云ふことが本旨ではありません。僅かな物を作つても、其物が高く賣れ、品質が少々位惡くても、それが一般の嗜好に投じて、澤山に賣れる物の方が利益が多いのでありますから、他の事情にして變らざる限りは、誰れも皆其方を採るのであります。即ち生産は何處迄も單に一の道行き、一の已むを得ざる所の手段であつて、目的は利殖と云ふことにあるのであります。

今日は生産を利殖の附帶事實とす

利殖の用に供せられる一定の貨幣價値額が資本であります。財の蓄積と云ふことが、貨幣價値額と云ふことの附帶的事實であるが如くに、生産と云ふことは利殖の附帶的事實に外ならないのであります。而して如何に巨萬の富を積みましても、之を利殖の用に供しなければ、それは決して資本ではありません。

生産資本なるもの無し

然るにボエーム・バヴェルク其他多數の學者は、營利資本、生産資本の區別を設けまして、利殖の爲に使はれる資本は營利資本であり、之に對して別に生産資本と云ふものがある。即ち利殖と云ふことを目的としないで、實物を生産すると云ふ意志を人間

が附與した所の資本が、生産資本であると、斯う主張して居りますが、私は此區別を斷然排斥する者であります。社會的資本、私的資本の區別の不可なるが如くに生産資本、營利資本の區別も當を得て居りません。資本は悉く私的資本で社會的資本など稱するものゝなきが如くに、資本は皆營利資本であつて、其外に別に生産資本などと云ふものは無いと信じます。

資本は必ず私有財産なり

資本の定義は右に擧げたので略ぼ盡して居るやうでありますが、併し精密に考へると、右の定義にはまだ大なる缺陷があります。それは何であるかと申しますと、單に一定の貨幣價値額と申すことは、恰も宙に浮いて居るものゝ如くに考へられる虞があります。此缺陷を塡める爲に、更に今少し精密に申さなければなりません。即ち一定

の貨幣價値額なるものは、必ず誰人かの所有に屬して居るものでなければならぬと云ふと是れであります。右の定義に於ても其所有者に云々と申しましたから、能く考へて讀んで呉れる人には誤解の起ることはありますまいが、併し左樣なことを賴りとするよりは、パッキリ明言して置いた方が宜いと思ひます。ソコデ右の定義を言改めて見ますと、『資本とは誰人かの所有する一定の貨幣價値額にして、其人に新なる貨幣價値額たる收入を與ふるもの是れなり』とすべきであります。所で誰人かの所有する一定の貨幣價値額と云ふことは、之を約めて申すと、私有財産と云ふことになります。

私有財産なければ資本なし

私有財産とは誰人かの所有して居る一定の貨幣價値額でありますから、誰人かゞ私有して居ると云ふことがなければ、其人に收入を與へると云ふことはないのでありま

して、即ち資本と云ふものは全然ないことになります。資本は私有財産制度の下に於てのみ存在し得るのでありまして、若し私有財産制度が無いとするならば、資本なるものも全く無いのであります。誰人にも専屬せざる資本などゝ云ふものは決してありません。此點からしても社會的資本とか或は國民經濟的資本とか云ふ言葉は全然排斥すべきであります。國民經濟なるものは一錢も所有して居るものでない、一物も占有して居るものではありません。社會は何等の財産をも有して居るものではありません。社會にある所の財産は、社會を構成して居る所の自然人なり法人なりが、夫れ〴〵に分有して居るのであります。唯だ之を綜合して、簡單に言表はす時には、社會の富とか、社會の資本とか云ふ言葉を用ゐますが、それは一の比喩的の言葉に過ぎないのであつて、左樣な實物は決して存して居らぬのであります。

國有財産も私有財産なり

斯く申すと直ちに之に反對して、國有財産は如何と云ふ人があるかも知れませんが、今日の制度に於ける國有財産なるものは、國家が公法人として有つて居るのでありまして、矢張り一私人と同じ資格で所有して居るのであります。日本の國有財産は、日本國民經濟の財産でもなければ、日本社會の財産でもありません。日本の國家なる一法人が有つて居る所の私有財産に外ならないのであります。社會主義が行はれて、社會が資本を所有する、社會が土地を所有すると云ふやうなことになれば、別問題でありますけれども、其が行はれて居らない今日の制度の下に於ては、總ての富、總ての資本は、皆無數の自然人若くは法人が寄集つて、夫れ〴〵に分有して居るのであります。其法人の中には、國家を初め、自治體もあれば、組合もあれば、社會もあ

り、財團法人、社團法人、其他の團體もありますが、何れも夫れ〳〵一の經濟單位を形づくつて居るのであります。

私有財産の二種

私有財産は大別して二つとします。第一は直接自己の使用に充てるもの、之を名けて使用財産又は利用財産（獨逸の學者は此事を多くは享樂財産 Genussvermögen 又は Nutzvermogen と申します）と言ひ、住宅、庭園、家具、什器、藏書、自用の馬車等の如きものを指して申します。第二は利殖營利の用に供せられる私有財産でありまして、之を名けて營利財産、又は利殖財産（獨逸語で Erwerbsvermögen）と申します。而して此營利財産又は利殖財産、これ即ち資本であります。即ち利殖營利と云ふのは、私有財産の額を殖やすことであり、營利財産又は利殖財産とは、殖やす爲に使ふ

私有財産と云ふことであります。

營利財産の意義

其殖やすと云ふのは、貨幣價値額を殖やすと云ふことで、必しも實物を殖やすと云ふことの意味ではありません。百坪の地所を百二十坪にする、一棟の家屋を二棟にすると云ふ意味ではなく、百圓の金を百二十圓にする、一萬圓の金を二萬圓にすると云ふことであります。享樂財産・使用財産と雖も、之を使用すれば、それだけの利用を使用者に對して與へるものでありますが、併し是は貨幣價値額の增加にはならないのであります。自分の所有して居る家屋に住んで居る爲に、一箇年に得る利用はどれ程かと云ふことは計れません。尤も家屋の場合の如きは、其最低限を貨幣價値で言表はすことは出來ます。例へば私が十坪の家に住んで居るとして、それから得る所の

利用はどれだけかと云ふことは分りません、之に依てどの位の樂しみを得て居るか、どの位の便利を得て居るかと云ふ、其樂しみ、其便利の全部を、貨幣額で言表はすことは出來ません。私が此家屋を自ら所有して居らないで、他人から借りて居るとするならば、如何程の家賃を拂はなければならぬかと云ふことは、大抵の場合には計れます。此家を借りるとしたならば幾らで借りるか、又反對に言つて、此家に自分が住はないで、自分は他に住ひ、此家を貸すとしたならば、幾らの家賃が取れるかと云ふことは計れます。今若し一箇年に百圓の家賃の取れる家に自分が住んで居るならば、自分は少くとも此家に住んで居ることに依て、貨幣價値に引直して見て、百圓だけの便利々用は得て居ると云ふことは分ります。併ながらそれは最低限でありまして、實際私が得て居の所の利用は必ずそれより多いのであります。私が百圓の家賃を拂つて或る家に住むと云

ふのは、其家に住むことに依て得る利益が、百圓の貨幣價値を所有して居るより大であるから、百圓の家賃を拂ふのであります。百圓の貨幣價値を持つて居る利益と、其家に住む利益と同じならば、決して家賃を拂つて其家に住むことは致さないのであります。

貨幣價値見積りの可能・不可能

外國では所得稅賦課の場合に於て、自己の所有家屋に住居して居る人に對しては、其家屋の賃貸價格、即ち家賃の額を見積りまして、之を所得額に加へて居る所があります。是は誠に然あるべきことであります。我國の如きは、まだ左樣に致して居りません。併し斯うしないと、甚だ不公平のことが起ります。例へば玆に甲乙兩人あつて、甲は親讓りの家屋を有し、乙は之を有つて居らぬ。然るに兩人とも一箇年に千圓

の所得があると致しますれば、日本の所得税法に依ると、兩人とも千圓に對する所得税を賦課せられますから、同額の所得税を拂ふことになるのであります。然るに、さうすると甲乙の實際の所得税の負擔は違ふのであります。乙は千圓の所得の中から家賃を拂はなければなりません、甲は家賃を拂はないで濟みますから、家賃だけは飲食、衣服其他の用に使ふことが出來ます。然るに甲乙同額の所得税を拂ふと云ふことは、是れ不公平であります。若し甲が、從來住んで居つた所有家屋を空けて、他人に貸渡して家賃を取り、自分は他に借屋して、家賃を拂つて住むことに致しますと、所得税は千圓に加ふるに貸家の家賃、假りにそれを百圓とすれば、千百圓に對して課税せられることになる。然るに彼れは借りて居る家に對して、矢張り百圓の家賃を拂ふとすると、所得額は從前と少しも變らないのに、所得税額は殖えると云ふ結果を惹起すのであります。是は極く見易いものに就てのことでありますが、家具什器の如き

は、之を使用することに依てどれ丈の利用を得て居るかと云ふことを、貨幣額に見積ることは甚だ困難、殆ど不可能のことであります。從つて享樂財産には、貨幣價値に見積つた利用の增加、即ち利殖と云ふことは無いものと認めるのでありまして、利殖するものは獨り營利財産に限ると定めて置くのであります。

富の增殖の眞義

今日の社會組織に於ては、財産・資本は皆夫れ〳〵に分有せられて居りますから、資本の殖えると云ふこと、富の殖えると云ふことは、各分有せられて居る所の資本額、私有せられたる所の富が殖えると云ふことの外にはないのであります。國の富が殖えると言つても、國の富なるものが無い以上は、其れの殖え樣がない。社會に富と云ふものは屬して居らないのでありますから、社會の富が殖えると云ふことは、實は間違

ひであります。一種の比喩的の言葉として用ゐるのは差支ありませんが、例へば歐羅巴の大戰以來、日本の富が著しく殖えたと言つても、是は日本の富が殖えたのではなくして、日本國に居る所の法人、自然人の中の、或者の富が殖えたと云ふに外ならない、即ち誰人かの懐が肥えたのであつて、日本の懐が肥えたと云ふのではありません。無論日本國中の總ての人の富が殖えると云ふこともありませうが、大抵の場合はさうではなくして、或る一部分の人の所有して居る富が殖えると云ふことであります。

富の增殖は多くは一部的

今歐羅巴の大戰の爲に、日本の富が殖えたと言つても、それは所謂成金階級の富が殖えたのであります。或は成金だけではなく、財産階級の富が一般に殖えたと言つて

差支ありませんが、財産階級でない者の富は必しも殖えて居りません。否、物價騰貴の爲に、多數の國民の富は却つて減つて居るのであります。能く日本の富が殖えた、結構だと言ひます。それは國民全體の富が殖えたのならば誠に結構でありますけれども、或る階級のみの富が殖えて、他の階級の富は殖えない、若くは却つて減つて居るとすれば、其處に甚しい不平均が起つて來て、富が殖えた殖えたと言つて喜んで居る反面には、甚だ面白からざる傾向が生じ、寧ろ殖えない方が宜いやうになるかも知れません。即ち近頃米騒動などの起つたのは、日本全體の富が殖えたのでなくして、殖える所には非常に殖えたけれども、又大變に減つて居る所もあつたからの話であります。併し今日の社會組織に於ては、是より外に致方がないのであつて、政府が如何に心配しても、國民全體の富を殖やしてやると云ふやうなことは出來ないのであります。國人が夫れ〳〵利殖に努めて、其分有して居る所の富を殖やすに任す外はあ

りません。唯だそれに就ては、成たけ不平均の起らない樣、不公平の生じない樣に、當に爲すべきだけのことは、是非なさなければならぬのであります。例へば不當なる買占、賣惜みをなして、無暗に己れの懐を肥やし、それが爲に多數の者の富を減らし、其生活を困難ならしめると云ふが如き場合には、政府が其有する權力を以て例へば暴利取締令の如きものに依つて之に干渉を加へると云ふことは正當のことであります。

社會的資本の增殖なし

若し經濟學の通說に於て言ふやうに、國民經濟的資本、社會的資本なるものがあり、とするならば、それが殖えると云ふことも亦なければならぬことであります。即ち國全體の富が殖えると云ふこともあり得る譯でありますけれども、其樣なことのないことは、右申上げた通りでありますから、此點から申しても社會的資本などゝ云ふものを認むることは斷然斥けなければなりません。場合に依ては、却つて害をなす所の一の空想となるのであります。

資本に下す最終の定義

以上申述べた所を綜合して、資本の最終的定義を與へて見ますれば、『資本とは利殖の用に供せられる私有財產である』と云ふことに歸着するのであります。或は少しく言換へて、『資本とは其所有者が之を增加しようと云ふ意志を附與した私有財產の謂である』と申しても宜しいのであります。即ち私有財產であると云ふことゝ、利殖の用に供せられると云ふことが、資本の本質を構成する二大要件であります。他は何れも附帶的性質たるに過ぎないものであつて、決して其本質に關係するものではありま

せん。

財産と云ふこと

財産と云ふ言葉は、英語には的確の言葉はありません。富と云のは確定した言葉がありますが、財産と云ふにキッチリ當嵌まる言葉は英語にはありません。獨逸語には、最も適當の言葉があります。即ち獨逸語では財産のことを Vermögen と申します。反對に獨逸語には、英語の富にキッチリ當る言葉がないのであります。英語では富のことを Wealth と申しますが、獨逸語の Reichtum と云ふのは、之に比べると遙かに不正確の言葉であります。故に英語のウェルスを獨逸語に飜譯して、ライヒトゥームと申したのでは、當嵌まらない場合があります。英語では Property と云ふのが、大抵の場合に財産と云ふ意味に用ゐられて居りますが、正確に申すと、プロパーテーと云ふ字は、所有權又は所有權の目的物のことであります。財産は是よりも意味の廣い觀念であることは、申す迄もないことであります。日本語には幸に富と云ふ言葉も財産と云ふ言葉も、キッチリ當嵌まる言葉があるのであります。

財産は卽ち能力

さて獨逸語のフェルメウゲンと云ふ字は、元來能力と云ふ字であります mögen と云ふ字は、英語の might（實力）と云ふ字と同じ語源から出て來た言葉でありまして、それに ver と云ふ字を加へて更に意味を強くしたのであります。今日でもフェルメウゲンと云ふ字は能力と云ふ意味にも使はれますが、それと同時に財産と云ふ意味にも使はれるのであります。それと云ふのは畢竟財産と云ふのは、經濟上に於ける人の能力に外ならないからであります。社會の中にある人が、經濟上、財産權上、又は私法

上、爲し得る力の總體が、即ち財産であります。一萬圓の財産を有つて居る人は、一萬圓だけの經濟的、資本的能力があるのであります。十萬圓の財産を有つて居る人は、十萬圓の經濟的、資本的能力があるのであります。從つて財産の無い者は、何等の能力がない、即ち無能力者であります。是は洵に實際の事實を適切に言表はして居るのでありまして、今日の社會組織に於きましては、何等の財産を有つて居らない勞働者の如きは、或る意味に於ては無能力者であり、反對に財産階級は有能力階級であります。

無能階級と有能階級

無能力階級たる勞働者は、多くの事に於て有能力階級の壓迫を免れることが出來ません。豈獨り勞働階級のみならんや、社會に住む所の人は、全體として見ましても、

有能力階級たる財産階級の爲に掣肘せられることを免れないのであります。トコロが今日の私有財産制度は、之を正當なることゝ是認して居るのでありまして、此認許に基いて一切の經濟的活動が行はれて居るのです。

財産の能力は實物に非ず

其能力は、決して或る實物が其處に在ると否とには關はらないのであります。關西地方に大成金某なる者がありまして、何千萬圓かの財産を所有して居るのでありますが、其住つて居る家は、纔に膝を容るゝに足る位の裏長屋の樣な處であつて、而もそれは借家であり、家には家具器物の類は殆ど無い。彼れは唯だ一個の鞄を携へて、諸方を馳廻つて居るが、常に傲語して言ふのに、自分の何千萬圓の財産は、悉く此鞄の中に在るのだと。如何にも彼れは、實物としては殆ど何物をも所有して居らないの

で、其日暮しの細民と何等擇む所がない樣でありますが、彼は莫大なる財産を所有して居る爲に、大なる能力者であるのであります。其鞄の中には、株券であるか、公債であるか、貸金證文であるか知らないが、兎に角巨萬の貨幣價値を有する書類が入れてあるのであります。是は極めて極端の例ではありますけれども、現にさう云ふ人がある。即ち財産と云ふものは、決して具體的の物質でないと云ふことは之を見ても明かであります。併し又此某の財産は、一面には必ず夫れ〳〵の具體的のものになつて居るに相違ないのです。彼れの所有して居る株券なり證券なりと云ふものは、一の紙片に過ぎないのでありますけれども、其紙片が代表して居る所の貨幣價値は、或は船であるか、或は工場であるか、或は倉庫であるか、或は商品であるか、色々變つて居るでありませうが、皆具體的の物になつて居るのであります。

オッペンハイマーの說

河上博士は『資本とは浮揚りたる財力なり』と云ふ一の新しい說を近來唱へて居られます。是は甚だ面白い想ひ着きでありまして、同博士の思想の如何にも獨創的なることを能く證明して居るのであります。それと言葉は違ひますけれども、稍々似寄つたことを言つて居るのはオッペンハイマーと云ふ學者であります。同氏は資本を具體化して居る所の具體的のものは、恰も輕氣球の風袋の如きものであつて、資本は其中に入る所の瓦斯である、輕氣球の風袋が大きければ大きい程餘計に瓦斯が入り、其だけ浮揚る力が强い。如何に瓦斯が澤山あつても、輕氣球の風袋が小さければ、瓦斯を入れることが少いから、從つて浮揚力が少い。有形物其物に浮揚る力の無いのは、恰も輕氣球の風袋の如くである。輕氣球の風袋は、空氣より遙かに重いので、決して浮

揚る力はない。否、浮揚ると云ふことから言へば、風袋は寧ろ邪魔になる、それだけ浮揚る力を害する。併ながら風袋がなければ、瓦斯を保つことが出來ないから、輕氣球の浮揚る力を現出する由がない。ソコで若干の目方のある所の風袋を使つて、其浮揚力を害することを避けることの出來ないが如くであると申して居ります。如何に大きな輕氣球でも、其中に入れた瓦斯を取り去れば、浮揚力が無くなつて、直ちに地に墜ちて來る、或は充實した瓦斯を幾分か減ずれば、漸次下降するが如くに、如何に澤山の機械があり、澤山の原料品があつても、之を浮揚らせる力がなければ、是れは何等の用をもなさない。併ながら是等の有形物が澤山あれば、資本なる瓦斯を十分に充すことが出來、資本なる瓦斯の力を充せば、有形物が澤山あればある程高く昇るのであると申します。故に河上博士の『浮揚りたる財力』と云ふのは、之を少しく訂正して、『資本とは浮揚らせる財力なり』と言つた方が適切かと思ひます。

マルクス說を評す

マルクスが資本を定義して『資本とは勞働者を奪掠し制御する道具なり』と申したことは前にお話申しました。是は資本の定義としては無論不十分であり、且つ其働きを言表はすのに、隨分思切つた言方ではありますけれども、併し必しも不當とは言へないのであります。寧ろ其働きの上に就ては、もつと之を擴張して行つた方が宜しいかと思ひます。資本の奪掠又は支配と云ふことは、若しそれが眞とするならば、決して單に勞働のみを奪掠し、支配するのでなくして、今日の資本組織の下に行はるゝ總ての經濟行爲を支配するのであり、又若し奪ひ取ると云ふことが言ひ得るならば、それは獨り勞働者のみを奪ひ取るのでなくして、他方に於ては勞働者の製品を消費する所の消費者からも奪ひ取るのであります。萬遍なく取つて來るのでありまして、單

に勞働者のみを奪ふと云ふことは當を得て居らないのであります。併し私は奪掠と云ふ言葉を使ふことには斷然贊成することが出來ません。

マルクス説の修正

故にマルクスの定義を次の如くに言ひ改めたらば、資本の働きを適當に形容したと言ひ得るかと思ひます。即ち『資本とは生産流通の兩方面に亘つて資本制度なかりせば他の經濟單位の所得となるべき部分から其場合々々に應じて何分かづゝのものを取去つて、之を己れの收益となすものである』。但し私は別に之を定義として擧げる譯ではありません。唯だ説明の便を圖つて、資本の働きを解り易く右の如くに申したに過ぎないのであります。偖て、斯く資本が總ての所得に亘つて其手を擴げるに於て、或は有形の財の蓄積たり、或は無形の權利たり、或は人事關係たり、其取る所の手段は色々ありますが、是等は皆手段たり、又條件たるに過ぎないものであつて、決して資本に收益のある原因其ものではありません。

資本生産力の眞相

ソコデ次に起つて來る問題は、然らば資本は生産要素として何等の意味を有つて居らないものであるか、單に收益と云ふことが資本の本質であるとするならば、資本を一の生産要素とすると云ふことは間違ひではないかと云ふ質問が必ず起つて來ることと思ひます。依て此質問に答へて見たいと思ひます。資本が生産の役に立つと云ふのは、土地や勞働が生産に役に立つと云ふのとは全く意味が違ふのであります。土地や勞働が生産に役に立つと云ふとは其本質であります。而して又其働きの上に於ても、生産の用をなすのであります。然るに資本が生産に役に立つと云ふことは、今日の實

際の狀態に就て言つたことでありまして、資本の働きの上の話であります。即ち言を約めて申せば、資本が生産に役に立つのではなくして、資本の形を取る所の夫れ〳〵の物が生産に役に立つのであります。

此働きは今日の資本組織には必然的なり

それならば此働きは資本に取つて偶然的に働くのであるかと云ふと、さうではない。今日の資本組織の下に於ては、是は必然的に伴つて居るのであります。何故であるかと云ふと、今日の生産組織は分業と協業による勞働組織を以て行はれて居るのであります。分業協業に依らざる所の生産と云ふことも、ないことはありません。併ながら、それには資本は先以て關係がないのであります。資本が生産を助けると云ふことは、勞働の組織が分業及協業に依て爲さるゝからであります。

資本は協業を可能ならしむ

前章に於て勞働の組織のことを段々お話して、殊に分業に基づく協業なるものが勞働の能率を非常に高めるものである、是がなければ今日のやうな非常なる生産力は實現せられないものであると云ふことを申上げました。さて、此偉大なる生産力を有する所の勞働組織は、今日の實際の狀態に於ては、資本があるから可能なのであります。又此組織があるからこそ、資本の存在が可能になつて居るのであります。此點に於ては兩者は相離るべからざる關係を有つて居るのであります。アダム・スミスは、一國の生産力を高むる道は分業の發達にありとして、此點から彼の『國富論』を說き始めて居るとは屢々申上げた通りであります。今日に於ては一般に廣く分業と云ふよりも、分業の一種類である所の『協業に基づく分業』が勞働の生産力を大ならしめ

て居るのであります、而して此意味に於て資本が生産上大に役に立つて居るのであります。協業の組織を維持して行くには、是非資本が無ければならぬと云ふのが現在の有様なのであります。是は絶對的にさうである譯ではないのです。唯だ今日の實際の有様として、それより外に方法が見出されないのであります。通說に於ては資本が生産に役立つと云ふのは、勞働者の生計を維持し、又勞働者に其勞働の目的物たる材料を與へ、勞働者が生産するに當つて要する所の、一切の要具設備を提供することが、資本の生産上に於ける働きであると說いて居りますが、是は決してさうではありません。資本と云ふ形を取らなくとも、勞働者が其生計を維持すべき物を得る途は、今日と雖も存して居るのであります。

資本たらざる生計維持資料

自足經濟に於ける勞働者の生計を維持すべきものは、決して資本なる形を取るものではありません。今日に於きましても、例へば俸給生活者の生計維持の用品は、それが商品である時には、資本の形を取ります、けれども、現に生計維持の用に供せられて居る時には、決して資本の形を取つて居るものではありません。其如くに、勞働の材料でも、勞働の要具でも、必ずしも資本の形を取らなければならぬと云ふことはありません。又資本の形を取る爲に、材料として餘計に役に立つ、生産要具として、より有効であると云ふ譯のものではないのであります。資本が生産に當つて勞働を助けると云ふのは、勞働をして分業及協業、殊に『分業に基く協業』と云ふ有効なる組織を作ることを得せしむると云ふ點に存して居るのであります。

何故に『分業に基く協業』なる組織は、資本あるに依つて初めて可能なるかと申すと、協業と云ふことは、多數の勞働者を集めて之を一定の計畫の下に監督指導し、而して一定の方針を與へることがなければならぬのであります。獨立したる所の勞働者は、何を生産し、如何に生産し、其生産したるものは如何に處分すべきかと云ふことを、勞働者として決定するのでありまして、別に勞働者以外に、此等のことに當るべき所の、資本主なる者を必要とする譯ではありません。然るに協業の組織の下に於ては、勞働者は此等の決定的處分權を皆失つてしまつて居るのであります。此事は勞働の意義を述ぶる所に於て、稍々詳しく申述べ、今日の賃銀勞働の特色は、勞働から其創意的要素を全く取去つたことにあると云ふことをお話致して置きました。是は今日の生産組織に於てはどうしても已むを得ないことであります。一の工場に集つて、協業の組織を取つて居る所の勞働者が、夫れ〴〵の創意を立てゝ、おのがじゝ勝手なことを爲して居つた時には、其生産は滅茶々々になつてしまつて、一定の効果を擧げることは出來ません。他に創意を定める者があり、總ての勞働者は、其創意の下に服從すると云ふことがあつて、初めて生産が實行せられることになつて居るのであります。

例を以つて說く

例へて申せば、一人々々で劍術の仕合をすると云ふ時には、其仕合をする人は各々仕合に要する所の一切の任務を取るのであります。然るに今日の軍隊になりますれば、數千人數萬人の人を集めて、互に對抗して戰鬪行爲をなすのであります。各戰鬪者が自ら戰鬪行爲の方針を立て、意志を決定するのではなくして、其上に立つて全體を指揮する所の司令官が是非なければならぬのであります。今日の勞働の組織は恰も軍

隊の如きものでありまして、其上に立つ所の指導者、命令者、引率者がなければ、複雑なる協業の組織は、實現せられないのであります。之を爲す者が即ち資本所有者たる所の資本主、若くは資本主の代表者又は代理者であります。

資本主任務の代理者

資本主の代表者又は代理者は、資本主から見れば一の雇人でありますけれども、同じ雇人でも、是は勞働者とは全く資格が違つて居るのでありまして、資本主の委任を受けて、資本主のなすべき任務を代つて執行して居るのであります。例へば株式會社に於ける支配人の如きもの、或は技師長の如き者是れであります。此等の人々は會社から見れば、多數の社員や勞働者と同じく雇人であります、併し多數の社員及勞働者は專ら勞働の方面、即ち所謂執行勞働に從事して居るのでありまして、支配人又は技師

長は、指導的勞働の任に當つて居るのであります。指導的勞働は今日に於ては資本主の任務となつて居るのであります。故に同じく會社の一雇人には相違ないけれども、其執り行ふ所の職務は、資本主的職務であります。

何故に資本主は引率者たりや

何故に資本主が引率者となるのであるか、引率者となるのは、必ず資本の所有者でなければならぬは、何う云ふ譯かと申しますと、複雜なる協業の組織を作るには、經濟的能力たる資本の力があるとを要するからであります。如何に人を率ゆるに足る技倆がありましても、其技倆は資本なる財力と伴ふにあらざれば、指導者となるとが出來ないと云ふのが今日の經濟生活の實狀であります。尤も資本なる財力を有する者は、指導者たり引率者たる所の技倆がなくとも、其技倆を備へた所の人を雇入れて、